Paulus

Op. 36 Felix Mendelssohn Bartholdy

メンデルスゾーン作曲

オラトリオ「聖パウロ」

2014年11月24日(月)

キャラホール

ご　あ　い　さ　つ

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン
代　表　　茂　木　容　子

本日は、メンデルスゾーン作曲オラトリオ「聖パウロ」演奏会にお運びくださいまして、まことにありがとうございます。

これまで盛岡バッハ・カンタータ・フェラインが主催し企画した中でも、今回の演奏会はその規模において空前のものです。６名の声楽ソリストに加え、一流の演奏家３９名による管弦楽、岩手大学教育学部附属小学校合唱部のメンバーと共に、１３０名を超える合唱。演奏会に向け、この１年じっくり取り組んでまいりましたので、その成果をぜひ皆さまに堪能していただければ幸いです。

企画実施のため、今回は多くの方から寄附、協賛をいただきました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。また、企画趣旨が認められ、公益財団法人サントリー芸術財団から、第３回ウィーンフィル・サントリー音楽復興祈念賞を受賞する栄誉に浴することができました。これもひとえに、関係者をはじめとする皆さま方のご理解とご協力の賜物であり、改めて身の引き締まる思いです。ありがとうございました。

演奏の要所で、音楽監督・指揮者である佐々木正利先生自らの解説が入ります。別冊の対訳とも照らし合わせながら、オラトリオ「聖パウロ」の壮大な物語を、どうぞじっくりとお楽しみください。

メンデルスゾーン作曲《聖パウロ》演奏会

F.メンデルスゾーン・バルトルディー ／ オラトリオ「聖パウロ」Op.36

独　唱	パウロ：多田羅迪夫	／ バス
	村元　彩夏	／ ソプラノ
	三谷　亜矢	／ アルト
	鈴木　　准	／ テノール
	小原　一穂	／ バス
	千田　敬之	／ バス
管弦楽	東京バッハ・カンタータ・アンサンブル	
	（コンサートマスター：蒲生克郷）	
合　唱	盛岡バッハ・カンタータ・フェライン	
	岩手大学教育学部附属小学校合唱部	
指　揮	佐々木正利	

2014年11月24日（月）14:30

キャラホール（盛岡市都南文化会館）

主催　盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

助成　第３回ウィーン・フィル＆サントリー音楽復興祈念賞

公益財団法人サントリー芸術財団による「ウィーン・フィル＆サントリー音楽復興基金」の助成事業「第３回ウィーン・フィル＆サントリー音楽復興祈念賞」は、日本の音楽文化を活性化することで、被災地および日本全体に活力を与え続けていくため、全国の団体・個人から本基金の目的に沿った活動を募集、2012年から10年間継続して贈賞するものです。

後援　岩手県教育委員会　盛岡市教育委員会　盛岡市文化振興事業団　岩手県合唱連盟　岩手日独協会

メンデルスゾーン作曲　オラトリオ「聖パウロ」作品 36

第 1 部

【ステージから解説】

1．序曲
2．合唱（主よ、あなたこそ神）
3．コラール（高き所ではただ神だけに栄光がありますように）
4．レツィタティーフ＆二重唱（信じる人々は心と思いを一つにし）
5．合唱（この者はやめようとしない）
6．レツィタティーフ＆合唱（最高法院にいた者は皆）
7．ソプラノ・アリア（エルサレムよ！）
8．レツィタティーフ＆合唱（人々は彼に襲いかかり）
9．レツィタティーフ＆コラール（そして人々は彼を石で打った）
10．レツィタティーフ（証人たちは自分たちの来ている物を）
11．合唱（見なさい、わたしたちは耐え忍ぶ人々を幸せであると称えます）

【ステージから解説】

12．レツィタティーフ＆バス・アリア（さて、サウロは教会を破壊し）
13．レツィタティーフ＆アリオーゾ（そして人々と共にダマスコへ向かった）
14．レツィタティーフ＆合唱（そしてサウロが旅の途中）
15．合唱（起きよ！光を放て！）
16．コラール（目覚めよ！とはるか高く望楼より）
17．レツィタティーフ（サウロに同行していた人々は）
18．バス・アリア（神よ、その慈しみをもってわたしを憐れんでください）
19．レツィタティーフ（さて、ダマスコにアナニアという弟子がいた）
20．バス・アリア＆合唱（わたしはあなたに感謝します、主よ、わたしの神よ）
21．レツィタティーフ（アナニアは出かけて行ってその家へ入り）
22．合唱（ああ、神の富と叡智）

《　休　憩　》

第２部

【ステージから解説】

23. 合唱（世のすべては今や主と、キリストのものとなりました）
24. レツィタティーフ（そしてパウロは使徒たちのところへ行き）
25. テノール＆バス二重唱（わたしたちはキリストの代わりの使者なのです）
26. 合唱（この使いは何と素敵なことでしょう）
27. レツィタティーフ＆アリオーゾ（聖霊によって送り出された二人は）

【ステージから解説】

28. レツィタティーフ＆合唱（しかし、ユダヤ人は）
29. 合唱＆コラール（彼はエルサレムで迫害していたのではなかったか？）
30. レツィタティーフ（パウロとバルナバは自由に、公に語った）
31. テノール＆バス二重唱（主はわたしたちにこう命じたのですから）

【ステージから解説】

32. レツィタティーフ（リストラの男で）
33. 合唱（神々が人間の姿をとって）
34. レツィタティーフ（そして、バルナバをゼウスと呼び）
35. 合唱（わたしたちにお恵みを、貴き神々よ）
36. レツィタティーフ、アリア＆コラール（使徒たちはこれを聞くと）
37. レツィタティーフ（民衆は二人に対して憤慨し）
38. 合唱（ここは主の神殿である！）
39. レツィタティーフ（そしてパウロが行く先を追いかけた）
40. カヴァティーネ（死に至るまで誠実であれ）

【ステージから解説】

41. レツィタティーフ（パウロは使いを送って）
42. 合唱＆レツィタティーフ（どうか自分を大事にしてください！）
43. 合唱（見なさい、どれほどの愛を父がわたしたちに示してくれたのかを）
44. レツィタティーフ（たとえわたしたちの信仰のために）
45. 最終合唱（しかし、彼にだけでなく、誰にでも授けてくれるでしょう）

《終演》

協　賛

赤塚　貴史

小野寺雄紀

鈴木勇二・たたえ

吉谷地勝久

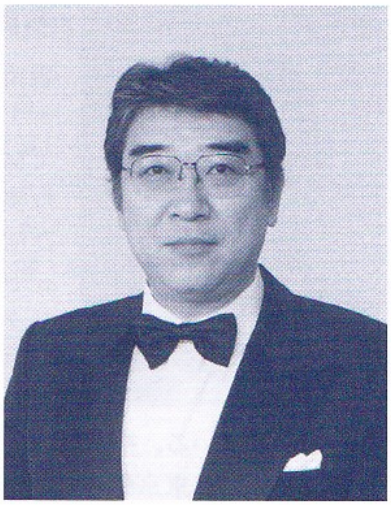
松江バッハ・カンタータ・フェライン

医療法人　友愛会　盛岡友愛病院

この演奏会は、ここに掲載した皆さまの御協賛をいただきました。
また、このほかに多数の皆さまの御寄附も頂戴いたしております。
心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

プロフィール

佐々木　正利（指揮）



東京芸術大学声楽科卒業。同大学院修士及び博士後期課程修了。故須賀靖元（声楽）、故服部幸三（音楽学）、小林道夫（演奏法）、森晶彦（発声法）、故松本民之助（作曲）、故岳藤豪希（宗教音楽）の各氏に師事。

1973 年にバッハ「クリスマス・オラトリオ」の福音史家で楽壇デビューして以来、バッハをはじめとする宗教音楽のスペシャリストとして揺るぎない地位を得ている。1979 年シュトゥットガルトに渡りL. フィッシャー教授に師事。1980 年第6回ライプツィヒ国際バッハコンクール声楽部門第5位入賞。同年より 1982 年までデットモルト北西ドイツ音楽大学に学び、H. クレッチマール教授に師事。在独中は欧州各国の演奏会に招かれ、特に 1980 年ウィーン楽友協会ホールでのマタイ受難曲では『若き日のP. シュライヤー』と新聞各紙で絶賛される。

帰国後もライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団、ベルリン交響楽団、国立ブカレスト交響楽団、ＮＨＫ交響楽団等、世界、日本の著名オーケストラのソリストとして度々起用され、K. マズア、H. シュタイン、H. ブロムシュテット、小沢征爾、R. シャイー等、世界を代表する数々の指揮者と共演。また世界的宗教音楽の名指揮者であるH. リリング、H. J. ロッチュ、M. コルボ、R. ヤコブス等率いる、シュトゥットガルト・バッハ合奏団、ゲヒンゲン聖歌隊、聖トマス教会聖歌隊、RIAS 室内合唱団等の演奏会に度々出演し、高い評価を受けている。

特に世界的バッハ指揮者H. ヴィンシャーマン率いるドイツ・バッハゾリステンの演奏会には、ソリストとしてだけでなく自身が育てた合唱団も度々共演し、その歌唱力、合唱指導力によって絶大な信頼を勝ち得ている。

1979 年、1985 年ザルツブルグ音楽祭に招聘され、モーツァルテウム管弦楽団、ベルリン聖ヘドヴィヒ聖歌隊と、バッハ「マニフィカート」、モーツァルト「戴冠ミサ」等を共演し好評を博した。

在独中オペラでは、ヴェストファーレン州立歌劇場等で、『コジ・ファン・トゥッテ』のフェランド、『フィデリオ』のヤッキーノ、スカルラッティ『グリゼルダ』のコッラード役で出演。

現在までリサイタル 32 回を数え、レコード・ＣＤも多数リリース、またテレビ、ＦＭ等にも度々出演している。

1970 年東京芸術大学バッハ・カンタータ・クラブの創設に携わり、多くの後進を育てると共に指揮者としての活動を開始。以後 40 年以上に亘って主に宗教曲の演奏に冴えをみせ、そのいずれもが名演の誉れ高い。特に盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団、岡山バッハ・カンタータ協会等を率いての 20 数回に亘るヨーロッパ公演では『シュッツ、バッハの世界的担い手』とした最大級の賛辞が新聞各紙に掲載され、1993 年のヴィンシャーマンとのマタイでは、『マタイ演奏史上、最も特筆されるべき演奏の一つ』、また 1995 年の J. ツィルヒ指揮ニュルンベルク交響楽団との天地創造では『音楽と言葉との見事なまでの融合』とその音楽作りが絶賛された。

1987、88 年には、リリング音楽監督のバッハ・アカデミーにて Ten. マスタークラスの講師を務め、またコダーイ・サマースクールや古楽サマースクール等でも指導講師に招かれるなど、その指導力については世界的に定評がある。門下生として世界の歌劇場で活躍する国際的歌手、オラトリオ・リート歌手、大学教授等音楽指導者を多数輩出しており、またコンクール優勝者等も数多い。

1994 年長年にわたる顕著な演奏・教育の業績に対し、第 47 回岩手日報文化賞（学芸部門）が贈られ、2011 年には日独交流 150 周年を記念して、ドイツ大使館より日独友好賞（功労賞）が授与された。

現在、岩手大学教育学部音楽教育科教授。二期会会員。日本声楽発声学会理事、日本音楽表現学会会長諮問委員、仙台バッハ・アカデミー理事。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団、岡山バッハ・カンタータ協会、東京 21 合唱団、東北大学混声合唱団、岩手大学合唱団、各指揮者、山響アマデウスコア音楽監督。二期会バッハ・バロック研究会講師。

ソリスト・プロフィール

多田羅 迪夫（パウロ ／ バス）

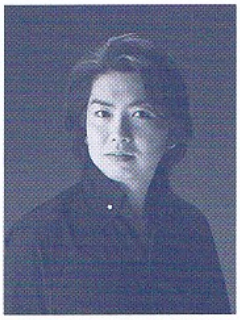
香川県出身。東京藝術大学及び同大学院修了。在学中に安宅賞受賞。第16回ジロー・オペラ賞受賞。イタリア留学後、6年に亘りドイツの歌劇場の専属歌手としてM.フレーニ、R.パネライ、F.ボニソッリ等と共演。帰国後も、格調高く豊麗な美声と温かさと深みをもった演奏で、宗教音楽、リート、オペラと三拍子揃った活動を展開。新日本フィルとは『ヴォツェック』（小澤征爾指揮）『ジークフリート』『神々の黄昏』（朝比奈隆指揮）等で評価を確立。また『オランダ人』『マイスタージンガー』ザックス、『魔笛』パパゲーノと弁者、『リゴレット』『フィガロ』『ドン・ジョヴァンニ』等の各タイトルロールでも好評を得ている。J.S.バッハ「ヨハネ受難曲」「マタイ受難曲」等の宗教的声楽作品のソリストとしても高い実績をあげている。初のリリースとなるCD「奏楽堂ライブ ドイツ歌曲の夕べ」はレコード芸術誌の特選盤の評価を獲得。東京藝術大学名誉教授。二期会会員。

村元 彩夏（ソプラノ）

青森県出身。岩手大学教育学部卒業。東京芸術大学大学院音楽研究科修士課程独唱専攻修了。同博士後期課程在籍。2014年度三菱地所賞授賞。第60回芸大メサイア出演。第20回友愛ドイツ歌曲コンクール第一位。文部科学大臣賞授賞。副賞としてウィーンにてリサイタルを行う。J.S.バッハの教会・世俗カンタータやミサ曲、「ヨハネ受難曲」「クリスマス・オラトリオ」、モーツァルト、フォーレ「レクイエム」、メンデルスゾーン「エリヤ」、ブラームス「ドイツレクイエム」等宗教曲や歌曲を中心に活動。2013年Théâtre Lyrichorégra20主催国際オペラガラコンサート（モントリオール）出演。声楽を佐々木正利、朝倉蒼生、秦貴美子、寺谷千枝子の各氏に師事。

三谷 亜矢（アルト）

大阪教育大学特設音楽課程、同大学院、東京藝術大学声楽科及び、同大学院独唱科修了。東京藝術大学在学中に、安宅賞受賞。二期会オペラスタジオ第36期修了。修了時に、優秀賞受賞。読売新人演奏会、ABC新人コンサート、アリオン・レクチャーコンサート等に出演。ドイツリート、バロック時代の作品を中心に演奏活動を行っている。これまでに、バッハ「マタイ受難曲」「ヨハネ受難曲」「ロ短調ミサ曲」「クリスマス・オラトリオ」、ヘンデル「メサイア」、マーラー「復活」「大地の歌」「嘆きの歌」等のアルト・ソロを務める。文教大学准教授。日本シューベルト協会会員、二期会会員、日本声楽アカデミー会員、二期会バッハ・バロック研究会会員。

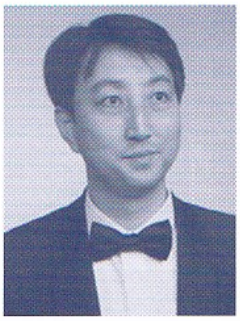


鈴木 准（テノール）

北星学園大学卒業。東京藝術大学卒業。同大学院修士課程修了後、音楽博士学位取得。『コジ・ファン・トゥッテ』フェランドで二期会デビュー。『魔笛』タミーノは東京二期会、兵庫芸術文化センター、日生劇場等で当り役となる。’12年ブリテン『カーリュー・リヴァー』狂女をロンドンとオーフォードの教会で演じる。新国立劇場『沈黙』モキチ『鹿鳴館』久雄、兵庫県芸術文化センター『セビリャの理髪師』アルマヴィーヴァ伯爵等に続き、今年3月びわ湖ホール『死の都』パウル役で新境地を開いた。バッハ・コレギウム・ジャパン「マタイ受難曲」等の国内外の公演・録音に多数参加、リリング指揮「ロ短調ミサ」も高く評価された。二期会会員。

小原 一穂（バス）

岩手大学教育学部音楽科卒業。東京学芸大学大学院修了。声楽を森肇子、今関由紀子、中村義春、移川澄也、佐々木正利、P.フッテンロッハーの各氏に師事。H.クレッチマール、K.ヴィトマー各氏の公開レッスンを通じドイツ歌曲や宗教音楽の歌唱について研鑽を積む。バッハアカデミー修了演奏会に於いてH.リリングの指揮の下ヨハネ受難曲のイエス役を歌い好評を得る。バロック～ロマン派にかけての宗教曲や第九のソリストを多数務める他、歌曲や創作オペラ、ミュージカルの分野でも活躍している。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン会員、コンサートマスター。グルッペ・ベッヒライン会長。盛岡市立黒石野中学校指導教諭。



千田 敬之（バス）

岩手県金ヶ崎町出身。岩手県立水沢高校、神奈川大学経済学部卒業。岩手大学大学院教育学研究科教科教育専攻音楽教育専修修了。声楽を佐々木正利氏に師事。神奈川大学合唱団在籍中、多田武彦作曲「尾崎喜八の詩から・第二」初演ソリストをつとめる。第一回スーパー・クラシック・オーディション東北大会出場。釜石フィルハーモニックソサイェティーとの共演で「カルミナ・ブラーナ」バリトンソロをつとめる。盛岡芸術祭、岩手芸術祭に参加。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン演奏会にて、カンタータ106番のバス・ソロをつとめる。佐々木正利氏のオペラ講座に出演。近年有志と共に、小学校、中学校にて日本歌曲の訪問演奏を行い好評を博す。現在、学習塾経営。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン会員。

オーケストラ　合唱　プロフィール

東京バッハ・カンタータ・アンサンブル（管弦楽）

東京バッハ・カンタータ・アンサンブルは、東京藝術大学の学内サークルとして、永年小林道夫氏のもとで、活発な演奏活動を続けてきた芸大バッハ・カンタータ・クラブの器楽のＯＢ，ＯＧを中心に、卒業後もバッハを中心とした宗教作品を演奏して行こうと有志が集まって結成された。メンバーは各自それぞれがソリスト、室内楽、オーケストラ、大学講師等、各方面で活動している為、多少流動的だが、1977 年にこの名前で活動をはじめてから既に 30 年以上を経ており、バッハやヘンデル等のバロックからハイドン、モーツァルトの古典派を経て、最近ではドヴォルザーク、ブラームス等のロマン派に至るまでレパートリーを広げている。その演奏はいずれもが様式感にのっとった生き生きとしたもので、共演した各合唱団や指揮者、ソリスト等から高い評価を得ている。

過去においては、W. ヤーコプ、H. ヴィンシャーマン、E. ヴァイアント、H. J. ロッチュ、P. ノイマン、小林道夫、黒岩英臣等、内外の演奏家との共演をはじめ、バッハ合唱団、ＣＭＡ合唱団等、全国各地の合唱団と共演し、現在は年間おおよそ 10～15 回程度、日本全国各地の合唱団やソリストからの依頼を受けて共演している。

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン（合唱）

1977 年「カンタータを歌う会」として発足。以来、一貫してＪ．Ｓ．バッハの作品を中心としたドイツ・バロック合唱曲の研究、演奏を行っている。その演奏が、1991 年ドイツにおいて「作品の語感、音、そして精神の完熟」という現地新聞の批評を受けるに至るまでには常任指揮者、佐々木正利のドイツ・バロック音楽に対する卓越した見識に基づく、熱意溢れる指導の積み重ねがあった。佐々木は超一流のエヴァンゲリストとして評価されるその発音、語感、様式感をもう一つのライフワークである合唱団の育成に注ぎ込み、その結果「＜言葉が生きる＞と＜音楽が生きる＞とは歌の世界では同義語である」というフェラインの音楽信条が演奏上の身上となるに至ったのである。

その後、H. ヴィンシャーマン、H. J. ロッチュ、J. ツィルヒ、岩城宏之等、世界的指揮者との共演を重ね、各指揮者より、ドイツ・バロック音楽を音楽的かつ人間的に表現できる合唱団として、熱い評価を得るようになった。この評価は、声の充実を追求する合唱団や、古楽器的な歌唱法を駆使して鮮烈な表現を目指す合唱団に与えられるものとは性格を異にする。暖かい音色を基調としながら、音楽の刻々と変化する様相を、その時々に相応しいニュアンスで大胆かつ繊細に、確信を持って表現しきろうとする、あくまで人間バッハへの共感を基調とする合唱団に対してのものなのである。

ミュンヘンのヘラクレスザールでハイドンの「天地創造」を演奏する（ニュルンベルク交響楽団）同じ週に、各地教会でア・カペラの小品を歌う。フェラインは、常に盛岡の教会での練習で培ったトーンを原点として活動してきた。

1998 年から 2007 年にかけてH. ヴィンシャーマン指揮の下、バッハの四大宗教曲全てを演奏した。今世紀に入ってからは、ベートーヴェン「第九」、マーラー「復活」、モーツァルト「レクイエム」、ブラームス「ドイツ・レクイエム」等、バッハより後の時代の大曲にも取り組んでいる。昨年夏には、有志によるドイツ演奏旅行を行い、ライプツィヒ市等三都市で演奏会を開催した。

岩手大学附属小学校合唱部（児童合唱）

岩手大学附属小学校合唱部は、歌が好きな４、５、６年生が集まり、朝や放課後に活動している。校内では、全校の音楽的なリーダーとして、朝会や集会の中で活躍。岩手教育芸術祭、ニューヨークヤングピープルズコーラスとの共演、訪問演奏など、校外での演奏の機会にも恵まれ、歌声を披露している。

ＩＢＣ子ども音楽コンクール、合唱小アンサンブルコンテスト、ＮＨＫ全国学校音楽コンクール（Ｎコン）などに出演し、Ｎコンに於いては、東北代表として全国ブロックコンクールに平成８年に初出場、２３年・２４年・２５年・２６年と４年連続出場、平成２５年度は銀賞の栄誉に輝いている。

オーケストラメンバー・プロフィール

蒲生 克郷（コンサートマスター ／ 第一ヴァイオリン）

東京藝術大学卒業。ＮＨＫ―ＦＭ「夕べのリサイタル・新人演奏会」に出演。
１９７６～７８年渡独。ヒルデスハイム市立歌劇場管弦楽団奏者、ヒルデスハイム室内管弦楽団コンサートマスターを務める傍ら、ヴュルツブルク音楽大学にて研鑽を積む。１９８０年より２０１４年３月まで東京藝術大学音楽学部管弦楽研究部非常勤講師、その間長年にわたり同部（藝大フィルハーモニア）コンサートマスターを務めた。
１９８９年エルデーディ弦楽四重奏団設立に参加し、現在に至るまで多くの演奏会、音楽祭に出演。また金昌国氏主催のアンサンブル of トウキョウのメンバーも務めている。故多久興、海野義雄、故ボリス・ゴールドシュタインの各氏に師事。

海保 あけみ（第一ヴァイオリン）

東京芸術大学音楽学部卒業。ヴァイオリンを片岡世界、正岡紘子、山岡耕作、日高毅各氏に師事。芸大バッハカンタータクラブにて、小林道夫氏の指導を受ける。現在フリーの演奏家として、オーケストラや室内楽の分野で活動。シンフォニア・フォンス・アルモニエのメンバー。尚美学園大学オーケストラ演奏員。

花崎 淳生（第一ヴァイオリン）

東京藝術大学及び大学院修了。1986 年から 87 年にかけて、ドイツ、カールスルーエに留学。「古典四重奏団」として、97 年村松賞、04 年文化庁芸術大賞、07 年同優秀賞、13 年東燃ゼネラル音楽賞奨励賞を受賞。「エルデーディ弦楽四重奏団」「古典四重奏団」「BWV2001」メンバー。CD 多数リリース。

長岡 聡季（第一ヴァイオリン）

東京藝術大学室内楽科博士後期課程修了。シューベルトの室内楽曲の研究により、同大学室内楽科初の博士号（音楽）取得。現在、横浜シンフォニエッタコンサートマスター。また、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、神戸市室内合奏団他、各地のオーケストラにてゲスト・コンサートマスターを務めている。東京藝術大学非常勤講師。

清岡 優子（第一ヴァイオリン）

東京藝術大学を経て、同大学大学院修士課程室内楽専攻修了。NHK 交響楽団アカデミー修了。第３回 Y.B.P. 国際音楽コンクール優勝等、多数のコンクールで受賞。2003 年、藝大シンフォニア英国公演のメンバーに最年少で選抜され渡欧。2011 年 5 月には、Duo Espoir 10th Anniversary CD 【ESPOCHE】をリリース。現在、東京藝術大学管弦楽研究部非常勤講師（藝大フィルハーモニア ヴァイオリン奏者）。

マヤ・フレーザー（第一ヴァイオリン）

桐朋女子高等学校音楽科を経てカナダ王立音楽院卒業。全日本学生音楽コンクール全国第1位（高校の部）、日本モーツァルト音楽コンクール第2位受賞。チェコ・フィルハーモニー室内管弦楽団、東京ゾリステン、東京交響楽団などのオーケストラとソリスト共演。東京藝術大学管弦楽研究部非常勤講師。藝大フィルハーモニアヴァイオリン奏者。

川原 千真（第二ヴァイオリン）

東京芸術大学および同大学院修了。海野義雄、田中千香士、ヴィオラ・ダ・ガンバを平尾雅子に師事。00, 04年、バロック・ヴァイオリンによるバッハ無伴奏ソナタ・パルティータ演奏会を開催。09年同全6曲2枚組ＣＤリリース(「レコード芸術」特選盤)。「古典四重奏団」の第1ヴァイオリン奏者として99年ギリシア・05年ドイツ公演、ＣＤ多数リリース。97年度村松賞、平成16年度文化庁芸術祭大賞、同19年度優秀賞、2013年東燃ゼネラル音楽賞(旧モービル賞)奨励賞を各受賞。「音楽三昧」メンバーとして02年アメリカ公演、第7回「サライ大賞」ＣＤ・ＤＶＤ部門賞受賞。

大谷 美佐子（第二ヴァイオリン）

東京藝術大学卒業。1990年、ボストンでロマン・トーテンベルク、ペーター・ザゾフスキー各氏の指導を受け、ロンジ音楽院にてリサイタルを行う。1991年、第105回神奈川県立音楽堂推薦音楽会に出演。横浜、東京でリサイタルを行うなど、現在ソロ、室内楽、在京オーケストラのエキストラなどの分野で活動中。イリス弦楽四重奏団、アンサンブルＶＩＴＡ、東京バッハ・カンタータ・アンサンブル、メンバー。(故)井上武雄、浦川宜也、瀬川光子各氏に師事。

磯田 ひろみ（第二ヴァイオリン）

東京藝術大学卒業、同大学院修士課程修了。第50回全日本学生音楽コンクール東京大会高校の部入選。日墺文化協会オーディション合格、奨励賞受賞。山田和樹指揮、三鷹市交響楽団とシベリウスのヴァイオリンコンチェルトを共演。八王子市芸術文化振興財団主催にてリサイタルを開く。芸大在学中バッハカンタータクラブに所属し、多くの宗教音楽を小林道夫氏のもとで学ぶ。岡山潔、ゲルハルト・ボッセ、マルクス・ヴォルフ、松原勝也、篠崎史紀の各氏に師事。

宮崎　桃子（第二ヴァイオリン）

桐朋女子高等学校音楽科・桐朋学園大学を経て、東京藝術大学大学院修了。ヴァイオリンを鷲見健彰、恵藤久美子、漆原啓子、バロック・ヴァイオリンを若松夏美の各氏に師事。モダンおよびピリオド楽器での演奏活動を行う他、後進の指導にあたる。東京バッハ・カンタータ・アンサンブル、メンバー。日本女子大学児童学科非常勤助手。

西尾　優子（第二ヴァイオリン）

東京藝術大学音楽学部器楽科ヴァイオリン専攻卒業。在学中バッハカンタータクラブに所属し小林道夫氏の指導を受ける。また「あがりを克服する」の著者カトー・ハヴァシュの指導を受ける。東京バッハ・カンタータ・アンサンブルメンバー。これまでに、山岡耕筰、故岩崎洋三、稲垣琢磨の各氏に師事

李 善銘（ヴィオラ）

神戸に生まれる。東京藝術大学管弦楽研究部講師を長年務めたのち、1996 年より名古屋フィルハーモニー交響楽団にてヴィオラの副首席奏者を務め、退職した現在はフリーの奏者として活動する傍ら、東京バッハ・カンタータ・アンサンブルを主宰。ヴィオラを故三輪長雄、故井上武雄、中塚良昭の諸氏に師事。

新井 豊治（ヴィオラ）

国立音楽大学卒、桐朋学園オーケストラ研究生を経て東京シティフィル創設に関わり後日本フィルハーモニー交響楽に入団。昨年定年を迎えて現在に至る。

鈴木 友紀子（ヴィオラ）

東京藝術大学器楽科（ヴィオラ専攻）卒業後、同大学院修士課程室内楽科修了。ヴィオラを菅沼準二・クロード=ルローン・川崎和憲の各氏に、室内楽を岡山潔・松原勝也・山崎伸子の各氏に師事。東京藝術大学バッハカンタータクラブにて小林道夫氏の指導のもと研鑽を積む。

榎園 麻衣子（ヴィオラ）

９歳よりヴァイオリンを始める。東邦音楽大学を卒業後、ヴィオラに転向。国内の主要オーケストラにエキストラ出演。また、オペラや室内楽、スタジオなどで演奏。ヴァイオリンを故小島勝、西島英子、羽島健の各氏に師事。ヴィオラを中塚良昭氏に師事。東邦音楽大学オーケストラ実技研究員。洗足学園音楽大学演奏補助要員。

伊藤 恵以子（チェロ）

東京藝術大学卒、同大学院博士課程修了。チェロを三木敬之、R.フラショー、倉田澄子の各氏に師事。日本音楽コンクール入選。パリ・エコールノルマルで２年間学ぶ。芸大在学中バッハカンタータクラブに所属し、卒業後はフリーで様々な演奏活動を行う。ピアノカルテット Ensemble Delice、Fiore、 Duo Piacere、ハープトリオなど室内楽にも力を入れている。訳書に「ポール・トルトゥリエ　チェリストの肖像」「メニューインとの対話」がある。

西澤 央子（チェロ）

東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て、同大学器楽科を卒業。チェロをヴァーツラフ・アダミーラ、三木敬之、レーヌ・フラショの各氏に師事。また、オルガンを鈴木雅明氏に師事。大学在学中は「バッハカンタータクラブ」に所属し小林道夫氏の指導の下、通奏低音奏者を務める。フリーランスのチェロ及びヴィオローネ奏者として、演奏会、録音に数多く参加している。東京学芸大学非常勤講師。

豊原 さやか（チェロ）

東京藝術大学音楽学部器楽科、京都市立芸術大学大学院卒業。大学院卒業後は新日本フィルハーモニー交響楽団団員として１年間活動。2002 年フライブルク音楽院（ドイツ）に入学。マインツ州立歌劇場付属オーケストラの研修生を経てフライブルク音楽院ディプロムを取得。2007 年帰国。現在、東京バッハ・カンタータ・アンサンブルなどで数多くの宗教曲を、また都内の主要オーケストラにおいてフリーで活動する一方、室内楽やソロの分野でも活躍。これまでにチェロを黒川正三、上村昇、花崎薫、C.ヘンケルの各氏に、また室内楽を河野文明、浦川宜也、R.クスマウルの各氏に師事。

蓮池 仁（コントラバス）

東京藝術大学卒業。桑田文三、永島義男に師事。東京芸大バッハ・カンタータ・クラブにて小林道夫の指導のもと研さんを積み、それが室内楽、オーケストラ活動の礎となる。８３～８５年H・リリング指揮日本バッハ・アカデミーに参加。９０年東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団入団。現在に至る。２００２年アフィニス夏の音楽祭に参加。アンサンブル音楽三昧メンバー。

田邊 朋美（コントラバス）

東京藝術大学及び同大学院修了。在学中安田生命クオリティ・オブ・ライフより奨学金を受ける。藝大バッハカンタータクラブにおいて小林道夫氏の指導を受ける。ムジカ・ヴィッツ、ラ・コレッガ・ディヴェルテンテメンバー。新星日本交響楽団を経て現在東京フィルハーモニー交響楽団コントラバス奏者。

阿部 礼奈（フルート）

東京藝大卒業後、東京藝大大学院を経てバーゼル音楽院へ留学、ソリスト課程修了。2012～2013 年ロームミュージックファンデーション奨学生としてパリ、エコールノルマル音楽院にて演奏家高等ディプロム、コンサーティストディプロムを取得。第 54 回全日本学生音楽コンクール全国大会第 1 位、第 14 回日本フルートコンヴェンションコンクール第 2 位、第 15 回クーラウ国際フルートコンクールデュオ部門第 1 位。

阿部 博光（フルート）

東京藝術大学卒業。元日本フィル首席フルート奏者。第 45 回日本音楽コンクール入選。文化庁在外研修員として、スイス、バーゼル市に留学。P・L＝グラーフ、R・メラーンの両氏に師事。東京で 10 年連続リサイタルを開催。札幌にて阿部博光室内楽シリーズ、リサイタルシリーズを開催。ＣＤ〈バロック 21〉〈笛楽〉〈フルート＆ピアノデュオリサイタル〉をリリース。現在、北海道教育大学教授

小畑 善昭（オーボエ）

東京藝術大学音楽学部卒、在学中の 1973 年、ＮＨＫ 毎日音楽コンクール（現日本音楽コンクール）管楽器部門第 3 位。同大学院音楽研究科修了。1979～1982 年まで東京交響楽団に在籍後、1985 年まで西ベルリンへ留学。1985～1990 年、新日本フィルハーモニー交響楽団首席奏者を経て、1990 年に東京藝術大学助教授となり、後進の指導に当たる。独奏・室内楽および古楽器奏者としても活発な演奏活動を繰り広げている。現在、東京藝術大学教授。

戸田 智子（オーボエ）

1987 年岩手県生まれ。弘前大学教育学部卒業、東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程修了。これまでにオーボエを鈴木繁、小畑善昭、和久井仁、池田昭子の各氏に師事。O. ヴィンター、H. シェレンベルガー、D. ヨナス、S. シーリ、T. インデァミューレ、R. ワン各氏のレッスンを受ける。室内楽を小畑善昭、岡本正之、日高剛の各氏に師事。2014 年 4 月より、東京藝術大学管弦楽研究部非常勤講師（藝大フィルハーモニアオーボエ奏者）。

下路 詞子（クラリネット）

東京藝術大学音楽学部器楽科クラリネット専攻卒業。同声会賞受賞。同大学院音楽研究科修士課程修了。芸大モーニングコンサート、室内楽定期演奏会などに出演。これまでにクラリネットを、矢野裕子、三倉麻美、山本正治、伊藤圭の各氏に、室内楽を河村幹子、小畑善昭の各氏に師事。現在フリーランスのクラリネット奏者として、オーケストラや室内楽を中心に活動している。

笹岡 航太（クラリネット）

東京藝術大学音楽学部卒業。同大学別科を経て、現在同大学大学院音楽研究科修士課程に在籍中。これまでにクラリネットを安藤涼子、山崎盾之、藤井一男、金川公久、亀井良信、三界秀実、山本正治の各氏に、室内楽を水谷上総、小畑善昭、磯部周平、池田昭子、三界秀実、山本正治の各氏に師事。

寺下 徹（ファゴット）

立教大学文学部独文科卒業後、東京藝術大学を経てミュンヘン音楽大学に留学。ファゴット専攻。立教大学では皆川達夫氏に西洋音楽史、キリスト教音楽史を学ぶ。東京藝大在学中は、同大学バッハカンタータクラブに所属。在独中は、放送、歌劇場などの主要オーケストラに客演の他、ミュンヘン・バッハ・オーケストラのメンバーとしてヨーロッパ各地を演奏旅行するなど幅広い演奏経験を積む。ファゴットを三田平八郎、カールコルビンガー、室内楽をゲルノート・シュマールフス、指揮を伴有雄、石丸寛の各氏に師事。現在は、音楽教育者、作曲家として、また各地の音楽団体から指揮者として招かれ幅広く活躍中。

柿沼 麻美（ファゴット）

栃木県矢板市出身。12歳よりファゴットを始める。第26回宝塚ベガ音楽コンクール木管部門第1位及び兵庫県知事賞受賞。これまでにファゴットを吉澤真一、坂田在世、水谷上総、岡崎耕治の各氏に、室内楽を小幡善昭、池田昭子、和久井仁、山本正治の各氏に師事。東京藝術大学を経て現在、同大学大学院修士課程音楽研究科に在籍。

川田 修一（トランペット）

芸大フィルトランペット奏者。国立音大および国立音大附属高校非常勤講師。国立音大卒業、矢田部賞を受賞。第78回、81回日本音コン入選。第25回日本管打コン第3位入賞。第49回マルクノイキルヒェン国際コンクールセミファイナリスト、ディプロマ授与。トランペットを北村源三、熊谷仁士、山本英助、ヒロ野口の各氏に師事。

松山 萌（トランペット）

島根県出身。東京藝術大学卒業時にアカンサス音楽賞、同声会賞受賞。 第30回日本管打楽器コンクールトランペット部門第1位、併せて文部科学大臣賞、東京都知事賞受賞。これまでに小曲俊之、佛坂咲千生、杉木峯夫、早坂宏明、古田俊博、佐藤友紀、栃本浩規の各氏に師事。現在、芸大フィルハーモニアトランペット奏者。

萩谷 克己（トロンボーン）

茨城県出身、 東京芸術大学音楽学部器楽科を経て東京芸術大学大学院音楽研究科トロンボーン専攻終了 現在尚美学園大学講師（トロンボーン実技） 東京佼成ウインドオーケストラで300枚を超えるCD,ビデオ、DVD収録に参加。 ソロ活動として、リサイタルの他、内外の団体との協奏曲演奏多数。 バロックトロンボーンによる古楽器演奏活動で、栃木、蔵の町音楽祭参加の他、東京ハインリッヒ・シュッツ合唱団、 バッハコレギウムジャパン、オーケストラシンポシオン、明治学院大学の演奏会、CD録音に参加。指揮者としてアマチュア吹奏楽団、オーケストラの定期演奏会を指揮。各地のバンド指導において、全国大会初出場7団体の補佐をする。

村田 秀文（トロンボーン）

宮崎県生まれ。13歳よりトロンボーンを始める。17歳で南日本新聞音楽コンクールに入選する。東京コンセルヴァトアール尚美を首席で卒業し卒業演奏会出演。その後同校ディプロマコース修学、ディプロマ・フレッシュコンサートに出演する。トロンボーンを河口安伯・伊藤 清・松本 熙の各氏に師事。ミュージカルからオーケストラまで活動の幅も広く、吹奏楽では東京佼成ウインドオーケストラを始めとして東芝EMIマスターピースシリーズやTAD Wind Symphonyと参加したレコーディングも数多い。ロイヤルチェンバーオーケストラ、イルミナートフィルハーモニーオーケストラ各団員、首席トロンボーン奏者。日本トロンボーン協会常任理事。

比嘉 一博（トロンボーン）

1987年、尚美音楽短期大学入学。1991年、尚美ディプロマコース入学。1995年、東京文化主催、新人推進オーディション合格。テナートロンボーンを松本熙。バストロンボーンを喜多原和人、井上順平の各氏に師事。現在、オーケストラ、ミュージカル、JAZZ等幅広いジャンルで活躍中。

劔持 清之（ポジティーフ・オルガン）

国立音楽大学卒業。チェンバロを西川清子、水野均、岡田龍之介の各氏に師事。各地の演奏会に出演しバロック奏者との共演や、佐々木正利、岩城宏之、H.J.ロッチュ、H.ヴィンシャーマン各氏指揮のバッハ「カンタータ」「ロ短調ミサ曲」「ヨハネ受難曲」「マニフィカート」等の通奏低音で、アンサンブル経験を深める一方チェンバロリサイタル、デュオコンサート等で活動。フランス、ドイツ公演など海外でも演奏を行なう。盛岡大学短期大学部教授。岩手県立大学非常勤講師。

大貫 ひろし（ホルン）

都立藝術高等学校音楽科、東京藝術大学音楽学部器楽科にて学ぶ。千葉 馨、守山光三、山本 真、フーベルト・ブラーデル、中川良平、小林道夫、多田逸郎、伊達 良、藤井凡大の各氏に師事。東京バッハ・カンタータ・アンサンブルのホルン奏者として、数少ないバッハ、モーツァルト、ハイドンなどの宗教音楽のスペシャリストとして活躍し、高音域の美しい音色には定評がある。また、モーツァルト・アカデミー・トウキョウ(MAT)ではナチュラルホルン奏者としても活動している。レパートリーは広く、ロック歌手ロッド・スチュワート横浜公演、八代亜紀ディナーショー、映画「踊る大捜査線ザ・ムービー交渉人　真下正義」などにも出演。近年、指揮者としても活動の場を広げ、2003年モーツァルトのオペラ「魔笛」を指揮してデビュー。また、アマチュアオーケストラの指導にも情熱を注ぎ、多くのオーケストラを育てている。東京バッハ・カンタータ・アンサンブル、モーツアルト・アカデミー・トウキョウ(MAT)ホルン奏者。アレクテ室内管弦楽団代表。

間宮 淳（ホルン）

ドイツ国立デュイスブルグ音楽大学卒業。ホルンを宮元辰彦、近藤望、アンドレ・ハビネッツ、アンドリュー・ジョイの各氏に師事。現在フリーランスの奏者として、オーケストラ、ソロ、室内楽で活動中。

大平 紹美（ホルン）

2012年、東京音楽大学卒業。ホルンを金谷直樹、守山光三、阿部麿、大貫ひろしの各氏に師事。在学中、東京音楽大学シンフォニックウィンドアンサンブル台湾公演に選抜メンバーとして出演。現在、フリーランス奏者として活動するほか、神奈川県内の中学校吹奏楽部を中心に講師として後進の指導にあたっている。

飯島 さゆり（ホルン）

東京藝術大学、フランクフルト音楽大学を卒業、ブリュッセル音楽院を修了。在独中、トリア市、及びドルトムント市立歌劇場オーケストラの契約団員を務める。埼玉県立大宮光陵高校音楽科非常勤講師。

三上 恭伸（ティンパニ）

東京藝術大学音楽学部器楽科卒業。打楽器を塚田靖、高橋美智子、有賀誠門の各氏に師事。現在(公)仙台フィルハーモニー管弦楽団打楽器奏者。尚絅学院大学子ども学科非常勤講師。日本演奏家連盟、日本吹奏楽指導者協会(ＪＢＡ)各会員。

オラトリオ《聖パウロ》　鑑賞の手引き

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン
コンサートマスター　佐々木幹雄

ようこそ！本日は１８３５年にフェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディ[注1]が作曲したオラトリオ[注2]《聖パウロ》を、２時間超にわたってお楽しみください。本公演は指揮者の佐々木正利岩手大学教授が、場面ごとに解説しながら演奏する予定でので、表現の内容や方法について分かりやすくご鑑賞いただけると思います。お楽しみに！

この「鑑賞の手引き」は、開演前の短い時間にお読みいただくことになると思います。どうぞお好きな項目からお読みになって、鑑賞の手引きとしてください。(なお、読みきれなかった分はお宅にお帰りになってからでもお読みいただけると幸いです。)

○　筋（ストーリー）と音楽

このオラトリオ《聖パウロ》は、イエス・キリスト亡き後間もない時代に地中海沿岸部[注3]に広くキリスト教を伝道したパウロという人物[注4]をめぐる出来事が筋となっています。それぞれ６０分前後の２部から構成されており、第１部はユダヤ教徒のサウロ（パウロ）が回心[注5]しキリスト教徒となったいきさつが、第２部はそのパウロ（サウロ）が異邦人にキリスト教を伝道した物語が、いずれも新約聖書の『使徒言行録』に基づいて展開されます。主人公の「パウロ」は「サウロ」と同一人物で、このテキスト（歌詞）[注6]でははじめは「サウロ」、回心した後は「パウロ」と呼ばれています。

ちなみに、以下の場面分けは筆者の独断によるものです。メンデルスゾーン自身は場面の捉え方について楽譜に何も記してはいません。

注１　Felix Mendelssohn Bartholdy(1809年ハンブルク-1847 ライプツィヒ)。詳しくは「○　「フェリックス・メンデルスゾーン」という人物」の項を参照のこと。

２　「オラトリオ(Oratorio)」の定義は難しいが、簡単に「オラトリオとは聖譚曲と訳される。宗教的または道徳的性格をもつ長大で劇的な台本を独唱、合唱、管弦楽のために作曲した作品」(戸口幸策・小泉文夫監修『ポケット音楽百科』 平凡社 1982)である。詳しくは「○　「オラトリオ」という形式」の項を参照のこと。

３　主に、現在のレバノン、シリア、トルコ、ギリシャ、イタリアといった地中海北東沿岸部。

４　人物像の詳しくは「○　「聖パウロ」という人物」の項を参照のこと。

５　「回心」とは「新に神の方向を向くこと。罪を悔い改め、イエス・キリストを救い主として受け入れること。」と定義されている(八木谷涼子『知って役立つキリスト教大研究』新潮社 2001, p.334)。パウロの場合、「回心の前も後も、彼が信じた神は同じ神である。[略]律法の行によって神に受け入れられる者になろうとして励んでいた律法の道を棄てて、十字架で死んで甦ったキリストを信ずるようになったことである。[略]彼が信じた神は前と同じ神であっても、神とともに歩む仕方が前とは根本的に変わった」(八木誠一『パウロ』清水書院 1980, p.30)ということ。

６　本作品のテキストは、１８３２年メンデルスゾーンが彼の友人で神学者のユリウス・シュープリング(Julius Schubring, 1806-1889)に台本の草稿を送り、シュープリングから別案の返事が帰ってくる、といった具合に共同作業としてつくられた。聖書の『使徒言行録』を中心に、諸書簡や旧約聖書からも採られ構成された。

【第１部】

(1) 開幕…呼びかけと賛美（第１～３曲）

第１曲　序曲(Andante イ長調 4/4 → Con moto イ短調 3/4 → Allegro → イ長調)
第２曲　合唱(Allegro maestoso イ長調 4/4)
第３曲　コラール(ホ長調 4/4)

冒頭からコラール[注7]《目覚めよ、とわれらに呼ばわる物見らの声》の音楽がファンファーレのように響き渡り、このオラトリオ全体のテーマ（信仰への目覚め）が暗示されます。途中不安な響きのフーガが展開しますが、最後に再び勝ち誇ったようにコラール旋律が登場します。まさにオペラなどの「序曲」と同じように、これから始まるドラマをまとめて提示しています。

続く合唱では、偉大な主なる神への呼びかけに始まり、異邦人への伝道が成功するように強く祈ります。コラール[注8]では一転して静かな祈りとなり、神の計り知れない力への感謝を歌い、確認します。

(2) 投石によるステファノの死…キリスト者初の殉教（第４～１１曲）

第４曲　レチタティーヴォ(ソプラノ独唱 → バス二重唱[偽証人] → ソプラノ独唱)
第５曲　合唱[ユダヤ教徒たち](Allegro 二短調 4/4)
第６曲　レチタティーヴォと合唱(ソプラノ独唱 → テノール独唱[ステファノ] → 合唱[ユダヤ教徒たち](Presto 2/2) → テノール独唱[ステファノ])
第７曲　アリア(ソプラノ独唱 Adagio 変ロ長調 3/4)
第８曲　レチタティーヴォと合唱(テノール独唱 → 合唱[ユダヤ教徒たち](Allegro moderato 二短調 4/4))
第９曲　レチタティーヴォとコラール(テノール独唱 → コラール(ヘ短調 4/4))
第１０曲　レチタティーヴォ(ソプラノ独唱)
第１１曲　合唱(Andante con moto 変ホ長調 4/4)

いよいよドラマが始まります。語り手としてのレチタティーヴォ[注9]が物語を進行します。その最初は、キリスト教最初の殉教者となったステファノ[注10]が捕縛される場面です。二人の偽証に加えてユダヤ教徒たちがステファノの布教活動について最高法院で激しく訴えます（第５曲）。大祭司に尋問されると、ステファノは朗々と自説を述べ(ステファノの弁明)ユダヤ教徒たちの行いを非難します。怒るユダヤ教徒たちは「殺せ！」と迫ってきます。ステファノが説いてもそれを受け入れようとしないユダヤ人たち（総じて「エルサレム〉」と象徴されている）を見て、人の子つまりイエス=キリストの嘆く言葉が、美しいソ〉プラノの旋律にのせて、まるでストップモーションのように歌われます（第７曲）。

注７　「コラール(Choral)」とはドイツ・プロテスタント教会における賛美歌のこと。ここで演奏されるコラールは Philipp Nicolai により 1599 年に作られたコラール。その第１番の歌詞は第 16 曲で歌われる。

８　Nicolaus Decius により 1522 年に作られたコラール。歌詞は前半がその１番、後半はその２番からとられている。

９　「レチタティーヴォ(Recitativo)」とは「叙唱と訳される。話し言葉の自然な抑揚を模倣、または強調した様式で、アリアなどのように旋律的表現を主とする様式に対する。」(戸口他 1982)

10　「ステパノ」とも呼ばれる。十二使徒ではなかったが、エルサレムの教会の指導者の一人。ギリシャ語も話すディアスポラの民(離散していたユダヤ人)の出身であった。「”霊”と知恵に満ちた評判の良い人」「恵と力に満ち、すばらしい不思議な業としるしを民衆の間で行っていた」と『使徒言行録』には記されている。

テノールのレチタティーヴォによって再び現実に戻り、群集は「石で打ち殺せ！」と叫びます（第８曲）。ステファノは十字架につけられたイエスのように[注11]「彼らに罪を負わせないで下さい。」と言って亡くなります。続くコラール[注12]はまるでステファノの心境のようです（第９曲）。

続いてついに、その迫害の現場にサウロ（パウロ）がいて関わっていたことが明かされます。一方キリスト教徒たちはステファノの死を悲しみ悼みます（第１０、１１曲）。

(3) サウロ（パウロ）の回心（第１２～２２曲）

第12曲　レチタティーヴォとアリア(テノール独唱　→　バス独唱[サウロ](Allegro molto ロ短調 2/2))
第13曲　レチタティーヴォとアリオーゾ(アルト独唱　→　(Andantino ト長調 4/4))
第14曲　レチタティーヴォと合唱(テノール独唱　→　女声四部合唱[イエス](Adagio 4/4)　→　バス独唱[サウロ])
第15曲　合唱(Molto Allegro on fuoco 二長調 2/2)
第16曲　コラール(Con moto 二長調 4/4)
第17曲　レチタティーヴォ(テノール独唱)
第18曲　アリア[サウロ](Adagio ロ短調 4/4　→　Allegro maestoso　→　Adagio come 1mo)
第19曲　レチタティーヴォ(テノール独唱　→　ソプラノ独唱[主イエス](Andante ハ長調 4/4　→　Poco animato)
第20曲　アリアと合唱(バス独唱[サウロ](Allegretto イ短調 6/8)　→　合唱)
第21曲　レチタティーヴォ(ソプラノ独唱　→　テノール独唱[アナニア]　→　Allegro di molto 2/2)
第22曲　合唱(Allegro moderato ヘ長調 4/4)

ここからいよいよサウロの登場です。はじめは、キリスト教徒を根絶やしにする信念が歌われます(第12曲)。続いてアルトのレチタティーヴォによってサウロの思惑が開示され、と同時にそのサウロをも包み込む主なる神の思いがアリオーソにのせて説かれます（第１３曲）。そして迫害に向かう旅の途中にサウロは突然の天からの光とともにイエスの声を聞きます（第１４曲）。合唱はそのことの意味を輝かしく示し（第１５曲）、続くコラール[注13]ではイエスを迎え入れるために心を目覚めさせなさいと歌います（第１６曲）。コラールを用いることでその内容は舞台上のドラマだけでなく会衆にも共有されます。

ドラマの視点はサウロに戻り、目が見えなくなったサウロは、その祈りの中に宣教への自覚が芽生えます（第１７、１８曲)。続いて、主なる神はキリスト教徒のアナニアにサウロのところに行くように告げ、サウロは主の慈しみに感謝して歌い、合唱もそれに続きます（第２０曲)。

サウロはアナニアによって開眼され、「イエスこそが救世主キリストである」ことを認めキリスト教徒となりました（第２１曲）。最後は（第２２曲）、これらの劇的な出来事を全て創り出した神の意図の素晴らしさを、合唱が賛美して幕を閉じます。

注 11　イエスは十字架につけられたとき「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。」(『ルカによる福音書』第２３章３４節)と語った。

12　Georg Neumark により 1641 年に作られたコラール。"Wer nur den Lieben Gott läßt wlten"の旋律を使っている。J. S. バッハはこのコラールを用いたカンタータ(BWV 93)を残している。またメンデルスゾーン自身も 1829 年にこのコラールを用いてコラール・カンタータを作っている。

13　第１曲序曲の冒頭で響いた旋律のもととなった、Philipp Nicolai により 1599 年に作られたコラールの１番。バッハはこのコラールを用いて全７曲から成るカンタータを作曲している(BWV140)。

【第２部】

(4) パウロとバルナバの伝道旅行への派遣（第２３～２７曲）

第23曲　合唱(Grave ロ短調 4/4　→　Allegro vivace 変ロ長調 3/4)
第24曲　レチタティーヴォ(ソプラノ独唱)
第25曲　二重唱 (バス、テノール) [パウロとバルナバ](Andante ト長調 4/4)
第26曲　合唱(Andante con moto ト長調 6/8)
第27曲　レチタティーヴォとアリオーソ(ソプラノ独唱　→　(Con moto 3/8))

キリスト教徒となったパウロの功績を示す合唱で、第２部が開幕します。物語の進行はソプラノ独唱です。パウロはバルナバ[注14]を伴って二人で伝道旅行に出かけました。その二人の喜ばしい心境を歌うのが二重唱と合唱です。

(5) ユダヤ教徒による謀略（第２８～２９曲）

第28曲　レチタティーヴォと合唱(テノール独唱　→　合唱(Allegro 二短調 4/4))
第29曲　合唱とコラール(合唱[ユダヤ教徒たち]Allegro molto ト短調 6/8　→　コラール(四重唱 Adagio ト短調 4/4)　→　合唱)

しかし、以前のパウロと同じように神の律法を守っていたユダヤ教徒たちは、回心したパウロを嘘つき者と非難し殺そうと企みます。続く合唱は、その前半はユダヤ教徒として、パウロへの不信から「殺せ！」と叫びますが、すぐに続くコラール[注15]では会衆となって「目覚め」ていない人々へも救いを示してくださいと祈ります。

(6) 異邦人への伝道（第３０～３６曲）

第30曲　レチタティーヴォ(テノール独唱　→　バス独唱[パウロ])
第31曲　二重唱(テノール、バス)[パウロとバルナバ](Allegro ホ長調 2/2)
第32曲　レチタティーヴォ(ソプラノ独唱)
第33曲　合唱[異邦人たち](Presto ハ長調 4/4)
第34曲　レチタティーヴォ(ソプラノ独唱)
第35曲　合唱[異邦人たち](Andante イ長調 3/4)
第36曲　レチタティーヴォ、アリアとコラール(テノール独唱　→　バス独唱[パウロ]　→　(Allegro assai moderato 二長調 4/4)
　　→　(Con molto di moto 二短調 3/2)　→　コラール)

続いて、二人の伝道がユダヤ人以外の異邦人に向かうことがパウロによって宣言され（第３０曲）、二人の伝道の言葉が二重唱で歌われます（第３１曲）。第３２曲からはソプラノの語り手によりリストラ[注16]という町でパウロが示した軌跡が語られ、パウロたちにいけにえを捧げて神として迎える合唱が続きます（第３２～３５曲）。しかし二人は「偶像はすべて虚偽だ。神は人が作った神殿には住むことはない。」と人々の行為を厳しく非難し、「自分が神の神殿なのです」と説き、合唱もそれに続きます（第３６曲）。この合唱ではソプラノが２

注 14　キプロス出身でギリシャ語も話す、アンティオキア教会の指導者。『使徒言行録』(第１１章２４節)には「バルナバは立派な人物で、聖霊と信仰に満ちていた」とある。

15　Johann Heermann によって 1630 年に作られたコラールの歌詞の１番及び５番を、”O Jesu Christ, meins Lebens Licht”(Königsberg 1559)のコラール旋律にのせて歌う。ちなみに J．S．バッハは”O Jesu Christ meins Lebens Licht”のコラールを使って器楽伴奏付のモテットを残している(BWV118)。

16　小アジア南西部の都市。西暦４７年に出発した第１回伝道旅行で訪れた。

部に分かれ、”Das Credo” つまり信仰告白のコラールの定旋律を歌うことで、パウロの身にこれまで起こったこと（これから起こること）全てを父なる神の意のままに行われたこととして受け入れるというパウロの心情を表します。

(7) ユダヤ教徒と異邦人による迫害（第３７～４０曲）

第37曲　レチタティーヴォ(ソプラノ独唱)
第38曲　合唱[異邦人](Allegro non troppo ホ短調 4/4)
第39曲　レチタティーヴォ(ソプラノ独唱)
第40曲　カヴァティーナ(テノール独唱(Adatio ハ長調 4/4))

それを聞いて異邦人たちは怒り、ユダヤ人と結託して「主の神殿を冒涜した者を石で打ち殺せ！」と叫び（第３８曲…第１部でステファノを「石打ちにしろ」と叫んだのと同じモチーフが使われています）追いかけましたが、パウロは主によって守られ伝道を続けることができたことを、ソプラノの語り手が語ります。

第４０曲では、困難にあいながらもそれに立ち向かっていったパウロを支えた主なる神の言葉が、瞑想的な曲想のカヴァティーナ[注17]で歌われます。

(8) エフェソの教会からのパウロの別れ（第４１～４３曲）

第41曲　レチタティーヴォ(ソプラノ独唱 → バス独唱[パウロ] → ソプラノ独唱)
第42曲　合唱とレチタティーヴォ(四重唱(Allegro moderato イ短調 4/4) → 合唱 → レチタティーヴォ(バス独唱[パウロ] → テノール独唱))
第43曲　合唱(Andante sostenuto イ長調 4/4)

伝道旅行を終えようとしていたパウロは、ユダヤ人キリスト教徒からもユダヤ教徒からも「招かざる客」となっていたことを知りつつエルサレムに戻ることを決意し、自分が築いたエフェソ[注18]の教会の長老たちに別れを告げます。長老たちはパウロを気遣って声をかけますが、パウロは覚悟を告げてエルサレムに向けて船出します。合唱は父なる神の愛の深さに感謝します。

(9) 終結…まとめと賛美（第４４～４５曲）

第44曲　レチタティーヴォ(ソプラノ独唱)
第45曲　合唱(Allegro maestoso 二長調 4/4 → Allegro vivace 二長調 2/2)

パウロの伝道旅行に同行しエフェソの教会を任されてもいたテモテへパウロが送ったとされていた手紙[注19]から、パウロの言葉がソプラノによって引用され、合唱に引き継がれます。パウロの生き方を価値づけるとともに、それを成し遂げさせた主なる神への賛美を壮麗に歌い上げて、全曲の幕が下ろされます。

注17　「カヴァティーナ(伊 Cavatina)」とは、素朴な旋律をもつ小規模な声楽曲。

18　小アジア西端、エーゲ海沿いにあり、ローマ帝国第４の人口３０万人を擁する小アジアの首都。第３回伝道旅行で訪れた。

19　歌詞は新約聖書『テモテへの手紙二』から。テモテは第二世代のキリスト教徒で、パウロの第２回伝道旅行に同行した。この『手紙』には冒頭に「パウロから、愛する子テモテへ。」とあり伝統的にはパウロによって書かれた最後の手紙とされている。

○　「聖パウロ」という人物

サウロ（パウロ）はローマ帝国の市民権を持つユダヤ人として紀元１０年頃に生まれました。ユダヤ人でしたから当然ユダヤ教徒でもありました。しかも厳格なパリサイ派の律法主義者で、エルサレムから逃げ出したキリスト教徒たちを探し出し脅迫して殺そうと活動していました。つまりキリスト教徒を迫害する立場だったわけです（第１部の前半、第４～１０曲の物語です）。

しかしその活動の途中に、天からイエスの声を聞いたことをきっかけに回心[注20]します（第１部の後半、第１０～２１曲です。「目から鱗」の件です）。

キリスト教徒となってからは、異邦人への伝道を使命と自覚し、現在のトルコ、ギリシャ、イタリア周辺を数度にわたって伝道のために旅しました。また、各地に興したキリスト教会を思想的に支えるべく多くの手紙を書き送りました。新約聖書の４つの福音書の後にある「〇〇への手紙」の約半数はパウロによって書かれたもの[注21]と考えられています。

この伝道活動の途中で様々な困難にあいます。かつて同じ信仰をもっていたユダヤ教徒からは裏切り者として迫害され（第２８～２９曲および第３７～３９曲）、一方かつてパウロによって迫害されていた記憶からキリスト教徒にはなかなか受け入れてもらえず、多神教を信じる人たちからは彼らの神をパウロが否定したことによって迫害され（第３２～３９曲）、さらにユダヤ人キリスト教徒との律法についての考え方の違い[注22]からエルサレム教会からも遠ざけられるといった具合でした。

しかしパウロは、その困難こそが自分がイエスから任された使命であると自覚し、伝道に邁進したのです。まさに「死に至るまで誠実であれ。そうすれば、あなたに命の冠を授けよう。恐れることはない、わたしはあなたと共にいる。」という第４０曲のカヴァティーナ[注23]の歌詞がその確信を表しています。

十二使徒でもなく、生前のイエスと直に出会ったわけでもないこのパウロという人物がなぜ「聖」をつけて呼ばれるほど重要な存在なのでしょうか。それはパウロのいくつかの功績によるのです。神はもともと約束された民であるユダヤ人を救うためにイエスを救世主としてこの世に遣わしたというのが原始キリスト教会の理解でしたから、そこには割礼や律法の遵守などのユダヤ人としての律法が残っていたのです。それに対してパウロは「人の義とされるのは律法の行いによるのではなく、キリストを信じる信仰によって義とされるためである。」（ガラテヤの信徒への手紙２・１６）と書き残したように、ユダヤ人に限らず異邦人も信仰さえもっていれば救われる

注20　「回心」については、[注5]を参照のこと。

21　新約聖書には『手紙』が全部で２１あり、そのうち１３もの『手紙』がパウロの名前で書かれている。

22　当時のユダヤ人キリスト教徒たちはイエスを救世主と信じるとはいえ、それは自分たちユダヤ人を神に選ばれた民（選民）として救うためと考えていた。したがって、ユダヤ人としての割礼や律法を守ることは当然のこととしていた。一方パウロは（かつてはユダヤ教徒の強烈な律法主義者であったが）、人間の力や努力によって救いを得ることはできず、ただ信じることで「義」とされると説いた。初期のキリスト教会にはこのような考え方の違いがあった。

23　「カヴァティーナ」については、[注16]を参照のこと。

存在であるとしました。これによって、それまでユダヤ人に限られていたキリスト教が世界に広がることができたわけです。また、パウロが、各地の信徒に宛てた手紙に記されているような非常に深く豊かな思索によってキリスト教を神学的に高めたことも理由として挙げられます。

ちなみに、パウロは紀元６１年にローマ軍に連行されてローマに行き、そこで布教活動を行いましたが、その最期については明確には記されていません。

さまざまな困難に出会いながらも、それを乗り越えて世界宗教としての礎を築いたパウロのドラマを、オラトリオ《聖パウロ》を通してお楽しみください。

○　「オラトリオ」という形式

「オラトリオ」とは教会の祈祷所・礼拝堂の呼び名です。そこでは典礼以外に祈祷あり、説教あり、聖書の朗読あり、宗教的な歌ありと、様々な活動によって宗教的観照と修養が行われていました。それが音楽のひとつの形式となっていったきっかけは、１６世紀後半のローマで「オラトリオ会」という信心会が教化のために始めたラウダ歌唱祈祷でした。その中から１７世紀になってG. カリッシミがラテン語による楽曲としての「オラトリオ」を祈祷会のためにたくさん作曲し[注24]、そのジャンルを確立しまし、それらはオペラと相互に影響し合いながら規模を拡大させ発展していきました。

１８世紀以降も、オラトリオは主に宗教的な題材をオペラほど華美にではないものの合唱に重点をおく、比較的大きな規模で上演するものとなっていました。イギリスではG. F. ヘンデルが[注25]、その後ドイツではF. J. ハイドンが[注26]オラトリオ作品を発表していました。説教的な性質をもつ物語であることから、その進行役となる語り手を担う独唱者を伴うという特徴が生み出されました。そしてしだいに数名の独唱者、多人数からなる合唱やオーケストラと、大規模な編成[注27]がとられました。１９世紀ドイツでは市民によるアマチュアの合唱運動[注28]が盛んになり、「オラトリオ・ブーム」とも呼べる時期[注29]を迎え、宗教的な題材によらないものも含め多くのオラトリオが作曲されました。それらは物語を叙情的な詩と音楽で綴り会衆の共感を呼ぶ「リリック・タイプ」と、物語を劇的に表現する「ドラマチック・タイプ」とに分けられるような特徴を見せるほどになりました（ちなみに

注24　Giacomo Carissimi(1605～1674)。オラトリオ作品は《イェフタ》ほか１５曲を残している。

25　Gorge Friedrich Händel(1685～1759)。オペラとともに、《メサイア》《エジプトのイスラエル人》《マカベウスのユダ》などのオラトリオも多い。

26　Franz Joseph Haydn(1732～1809)。オラトリオとしては《天地創造》《四季》を作曲した。

27　本オラトリオ《聖パウロ》の器楽編成は次の通り(カッコ内はパートの数)。フルート(2)、オーボエ(2)、クラリネット(2)、ファゴット(2)、コントラファゴット、ホルン(4)、トランペット(2)、トロンボーン(3)、ティンパニ、弦楽合奏、オルガン。

28　１９世紀ドイツでは、「教養」理念の追求を目的に多くの「フェアアイン(Verein)」が自発的に設立された。合唱協会運動はその代表的なもの。ベルリン・ジングアカデミーなどが有名。

29　1800年～1840年頃。ドイツの様々な地方でいろいろなオラトリオが上演された。作品数はしだいに増え、1820年代は１６５曲、1830年代には３３１曲が上演されている。また演奏地域も広がり1830年代後半には５０近い都市で上演されていた。

１８３６年に初演されたこのオラトリオ《聖パウロ》は後者の特徴をもっています)。

そのような中、メンデルスゾーンは１８２９年にＪ．Ｓ．バッハの《マタイ受難曲》を蘇演しバッハ再評価への口火を切りましたが、その後１８３３年からはデュッセルドルフで音楽祭[注30]の場を中心にヘンデルの多くのオラトリオを上演し紹介しました。これによって、当時イギリスでは名高かったヘンデルの作品がドイツにも広まることとなりました。

このヘンデル研究の成果がメンデルスゾーンにとってオラトリオの最初の作品となる《聖パウロ》に存分に生かされています。聖書の各所から集めた言葉でテキストを構成すること、複数の独唱者のレチタティーヴォによって物語が進められること、大規模で対位法的な合唱曲がたくさん登場すること、多彩な響きをつくるオーケストラが活躍することなどです。また、Ｊ．S．バッハの《マタイ受難曲》からも学んでいます。眼前でドラマが展開されているような物語への音楽付け、物語の展開の途中へのコラールの挿入、群集や会衆などマルチな役どころへの合唱の利用などです。ドラマチックな展開でしかも多彩で魅力的な響きをもつオラトリオ《聖パウロ》を、じっくりとお楽しみください。

○　「フェリックス・メンデルスゾーン」という人物

フェリックス・メンデルスゾーンは１８０９年にハンブルクで生まれました。その１０年前にはF．Ｊ．ハイドンのオラトリオ《天地創造》、８年前には《四季》がいずれもウィーンで初演されており、そのハイドンが７７歳で亡くなったのがまさに１８０９年でした。すでにベートーヴェンやウェーバー、シューベルトらが音楽界で活躍している時代に、ベルリオーズ（1803年生)、ショパンやシューマン（1810年生)、リスト（1811年)、ヴァーグナーやヴェルディ（1813年生）らと同時期に生まれました。しかし残念なことに３８歳という若さで１８４７年にライプツィヒで亡くなりました。

両親ともにユダヤ人の家系の出身で、人種的にはユダヤ人でしたが、７歳の頃に両親により兄弟姉妹と共にルター派プロテスタントのキリスト教徒として洗礼を受けさせられました[注31]。ちなみに両親はその６年後に改宗し、その際に当時の社会に受け入れられるようにと、メンデルスゾーンという姓の後にユダヤ人的でない「バルトルディ」という姓をつけました。しかし、それにも関わらず人種的な差別問題は折に触れて表面化していた[注32]

注30　1817年から始まったニーダーライン音楽祭。デュッセルドルフ、エルバーフェルト、アーヘン、ケルンで毎年同時期にシリーズ化して開催された。メンデルスゾーンは音楽祭の音楽監督を何度かつとめた。《聖パウロ》の初演も1836年(5月22日)のこの音楽祭であった。ちなみに、ドイツで最初の音楽祭は1810年にチューリンゲン地方のフランケンハウゼン音楽祭で、その1日目にハイライトとしてオラトリオを演奏するというスタイルが、その後各地で開催された音楽祭でも真似されるようになった。

31　父親のアブラハム・メンデルスゾーンは長女のファニーに「我々はお前とお前の弟妹たちをキリスト教徒として教え育ててきた。なぜかといえば、［略]これが最も教養ある人々の信仰だからだ。そして、信じる者には決して道を誤らせずに、愛と従順と寛容と忍耐の心をやしなってくれるのだ。」と説明している。

32　1819年ドイツにおける「ユダヤ人の嵐」の年には顔見知りのプロイセン王子の一人にからかわれたり、1824年には家族で休暇のため訪れていたロストックの町で石を投げつけられたり罵られたりといったことを経験している。また、1833年にツェルターが亡くなったことにより行われたベルリン・ジングアカデミーの音楽監督の後任選挙では、すでに相当の実績がありながらもユダヤ人であることを理由にメンデルスゾーンの票が伸びず、K.F.ルーゲンハーゲンに破れた。

ようです。

作曲家としてはもちろん、ピアニストやオルガニスト、初の本格的な指揮者[注33]としても活躍しました。２６歳（1835 年）から晩年まではライプツィヒのゲヴァントハウス管弦楽団の音楽監督兼指揮者として、演奏プログラムに歴史的な音楽のシリーズを取り上げたり、楽団員の待遇改善に努めたりもしました。また、同地にドイツ初の音楽学校[注34]を開設し、事実上の学長・芸術監督をもつとめました。

作曲家として、ロマン主義的な時代にありながら器楽曲では古典派の音楽を規範とし、声楽曲ではバッハの音楽を目指したとされています。それは１１歳から２４歳まで作曲を師事したベルリン・ジングアカデミーの音楽監督であったK．F．ツェルターの影響が大きかったからでしょう。ツェルターはJ．S．バッハの弟子のJ．P．キルンベルガーの弟子であり、メンデルスゾーンは、当時すでに「難解」とされていた厳格な対位法についてしっかりと学ぶことができたのでした。没後はヴァーグナーらによるユダヤ人排斥の標的にされ作品を貶められたり、ナチス時代にはメンデルスゾーンの作品は演奏禁止[注35]とまでされたりもしていました。

キリスト教徒として生きながらもユダヤ人であることをいつも意識させられていたメンデルスゾーンが、対位法を駆使した合唱曲やコラールを盛り込んで作ったオラトリオ《聖パウロ》を、じっくりとお楽しみください。

注 33　ゲヴァントハウス管弦楽団では今日のような指揮棒を使って指揮し、演奏曲目の選定から作品の解釈までおも指揮者の権限とした。つまり単なるまとめ役ではなく、芸術的な責任の全てを負って指揮をするという立場を明確に示した。

34　1843 年にライプツィヒ音楽院としてゲヴァントハウスの中庭に設立された。今日では「フェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディ音楽演劇大学ライプツィヒ」という名前となり、ライプツィ旧市内よりやや南西の所にある。

35　ゲヴァントハウス管弦楽団の指揮者をつとめたクルト・マズーア氏は１１歳か１２歳の頃の１９３９年の出来事としてピアノの教師の言葉から次のように言われたと記している。「さあ、この次までにこの曲をさらって来なさい。ただ、練習する時に必ず音が外へ漏れないように窓を閉めるのを忘れてはいけませんよ。メンデルスゾーンの音楽を演奏することは禁止されているのですから。」（フェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディ基金『フェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディとその魅力』聖公会出版 2006, p.6）

『ステファノ、アナニア、バルナバに寄せる想い』

みなさま、こんにちは。指揮者の佐々木正利です。本日は、わたしたち盛岡バッハ・カンタータ・フェラインのメンデルスゾーン『聖パウロ』演奏会にようこそおいでくださいました。こころより御礼申し上げます。

数々の珠玉の名作を残してくれたメンデルスゾーンですが、彼の最大の功績は、何といってもかの『マタイ受難曲』を復活上演したことで、信じられないことに、それまで約100年間忘れ去られていたヨハン・セバスティアン・バッハを、再発見させてくれたということではないでしょうか。1829年にベルリンで蘇演されたマタイが、ライプツィヒの聖トマス教会で初演されたのは1727年のことですから、正確には102年ぶりということになりますが、メンデルスゾーンが使った楽譜は1729年版でしたので、100年のインパクトもあながち嘘ではないということになります。このバッハの自筆譜の写本、じつはメンデルスゾーン14歳のクリスマスプレゼントとしておばあちゃんからもらったもの。それをみても、メンデルスゾーン家は素封家で教養の高い家柄だったことがわかります。

それはさておき、バッハでプロ歌手デビューを果たしたわたくしが、次第にレパートリーを広げていった過程で、最初に出会ったロマン派のオラトリオがメンデルスゾーンの『エリヤ』であり、３回のエリヤ本番体験後に続いて『聖パウロ』を知ることとなりました。エリヤの第26曲目 「Es ist genug! So nimm nun, Herr...（主よ、もう充分です。わたしの命を取ってください）」のアリアは、悲痛な表情を持ち、メンデルスゾーンらしい歌謡性に満ちていて、すぐにわたしのこころを虜にしたのでしたが、初めて聴いたとき、あれっ、この曲は何かの曲に似ているぞ、と思ったものです。それもそのはず、このアリアは、緩急緩の構成といい歌詞の内容や主題のモチーフといい、バッハの『ヨハネ受難曲』のアルトのアリア「Es ist vollbracht（それは成就した）」にそっくりなのです。このことからも、メンデルスゾーンがバッハを勉強していたことはよくわかりますし、彼の音楽にみるバッハの影響は、パウロを知るにことによって、より顕著なものとしてわたしのこころに染み入ってくることとなりました。パウロのなかで、わたしにとって忘れられないカンタータ第140番のコラールが肝心な場面で使われていること、それがその大きな理由です。

わたしがカンタータのテノールソロを初めて担ったのは他でもありません、東京芸大バッハ・カンタータ・クラブ（本日のオーケストラのメンバーの大半がこのクラブのOB・OGです）の活動において歌った第78番「イエスよ、あなたはわたしの魂を」のアリアでしたが、その後、バッハ歌手として世間から認知されかけてきた頃、二人の世界的女流音楽家の公開レッスンに抜擢され受講したことがありました。一人はブランシュ・オネゲル・モイーズといって、かの有名な作曲家アルテュール・オネゲルの娘で、高名なフルーティスト、マルセル・モイーズの息子でピアニストのルイ・モイーズと結婚した世界的ヴァイオリニストであり、彼女は義父らとともに北米は「マールボロ音楽祭」にてバッハ演奏や講習を担当していた著名な指導者でした。もう一人は、ローレ・フィッシャーといって、西ドイツ国家芸術家にして世界的名声を博すアルト歌手であり、シュトゥットガルト音楽大学教授として数多くの優れた門下生を輩出、東ドイツはライプツィヒで開催されている国際バッハ・コンクールに、唯ひとり西側諸国から審査員として起用された、文字通りのバ

ッハの権威者でありました。この相次いで開かれた公開レッスンでは、なぜか課題曲が示され、その両者とも何とカンタータ第140番「目覚めなさいと呼ぶ声がする」だったのです。そこでわたしは、レチタティーヴォとコラールを歌ったのでした。

さて、わたしがカンタータ第140番を忘れられないのには三つの理由があります。一つ目は、前段に紹介した公開レッスンにて、二人の先生よりお褒めのことばを頂戴したことです。わたしにとってバッハの歌唱を褒められたのは初めてといってよく、しかも世界的権威からのおことばでしたから、どれほどの励みになったでしょうか。それだけではなく、ブランシュ先生からは「あなたはソロだけではなく合唱も指導していると聞いています。あなたの歌を聴いていると、きっと合唱もすばらしい指導をなさっていると確信します。あなたの合唱団でぜひやって頂きたい曲があるのですが・・・」と言って頂き、彼女の父オネゲルの『クリスマス・カンタータ』の楽譜を頂戴したのでした（この曲は10年近くを経て、岩手大学合唱団の定期演奏会で取り上げさせて頂きました）。また、フィッシャー先生からは「来年はバッハ・コンクールが開催される年（当時は４年に１度の開催でした）なのでぜひ挑戦してみなさい」とお声掛け頂き、それが後のドイツ留学につながるのですから、人生とはわからないものです。もっとも、こんな手厳しい指摘もされました。「あなたのレチタティーヴォはドイツでも通用します。でももう少し聴いてみないことにはね。そうそう、ヨハネ受難曲のペテロが外に出て号泣する場面を歌ってみてください」と言われて、実はわたしはヨハネを歌ったことがなく、そのことを話したならば、「バッハ歌いを標榜するテノールが何をサボっているの！　名倒れよ！」と叱咤されたのでした。もちろん、このあとわたしはヨハネを死にものぐるいでさらったのは言うまでもありません。

140番が忘れられない理由の二つ目は、今ではわたしたちフェラインの誇りと財産となっている、バッハの世界的権威ヘルムート・ヴィンシャーマン先生との最初の出会いが、このカンタータだったからです（今はもう廃盤になりましたが、CD「ドイツ・バッハゾリステン名演集」の最初に１曲目が、最後に終局コラールが収録されています）。そこでわたしたちの受けた衝撃の強さは、それこそ尋常なものではありませんでした。先生率いるドイツ・バッハゾリステンのみなさんの醸し出す生き生きとした音楽に、世界のトップがどれほどすごい音楽をしているかを目の当りにさせられ、こういった音楽家たちといっしょに音楽できるよろこびを、魂が震えるほどの感動をもって受けとめさせて頂くことができました。同時に、ヴィンシャーマン先生もわたしたちの合唱を高く評価してくださり、その後、先生とはバッハの四大宗教曲（マタイ、ヨハネの両受難曲、ロ短調ミサとクリスマス・オラトリオ）をはじめとして、数多くの楽曲を共演させて頂きました。

さらに、140番がこころに刻まれた最後の理由は、多分にパウロの想いに共通していることにあると思っています。メンデルスゾーンが、このオラトリオのなかで140番のコラールを登場させるのは、物語の全体を暗示する序曲の冒頭と、第１部の後半のクライマックス、すなわちサウロの回心の場面（このときはまだ、サウロと名乗っていた）なのですが、もともと熱心に、そしてまじめに神を崇拝していたサウロだからこそ、突然天から光が射して目が見えなくなったとき、イエスの声が聞こえたのではないかと思います。ここで、もとのカンタータのテーマ、すなわちマタイによる福音書25章の１-13節に記された10人の乙女の喩えを紹介しておこうと思います。それは、10人の乙女が灯火を持って花婿を迎えることとなりましたが、到着が遅

れみな眠り込んでしまいます。そこへ到着を知らせる声、目覚めた乙女たちはすぐに灯火を整えますが、10人のうち5人の乙女はうっかり油の用意をしていなかったのですね。その彼女らが油を買いにいっている間に花婿は到着し、買い物に出た5人は婚礼の席から閉め出されてしまった、というお話です。つまるところ、いつ救い主が到来するかわからないわけだから、しっかりと備えをなしていなければならないことを、聖書は諭しているのです。わたしは、パウロほど誠実に、切実に主を待ち望んでいたわけではありませんでしたが、みずからの求道の過程のなかで、このカンタータのテーマは、強くわたしを後押ししてくれたものでした。こうして、バッハがコラールの原作者であるフィリップ・ニコライの旋律を巧みに昇華し、わたしにとって最愛と言っても過言ではないほどのカンタータとして、140番はこころに刻まれることとなったのでした。

初めてオラトリオ『聖パウロ』を聴こうとレコード針をおろしたならば、何と冒頭からこのコラールが地の底から促すように湧き起こってくるではありませんか。これには正直参りました。メンデルスゾーンもやるなあと、一本取られた気持ちになりました。思ってみれば、確かにメンデルスゾーンもパウロ同様、ユダヤ教からキリスト教（ルター派）に改宗した人間ですから、真の救世主を待ち望み、ついにはイエス・キリスト出会えたパウロの気持ちはよくわかったはずです。そして、パウロが一心に備えをなしていたことに感動を禁じ得なかったはずです。それがゆえ、140番のコラールを配したのでしょうが、この配剤が、わたしのこころを『聖パウロ』の虜としてしまった最大の要因だと思います。このパウロは熱血漢で頑固者でしたから、役としてはバスパートがふさわしいとわたしも思いますが、一方で、テノールにメンデルスゾーンが、ステファノ、アナニア、バルナバと、パウロに大きな影響を与えた三人の共同者役を任せてくれたことに、ほんとうに感謝しています。なぜならば、この三人は敵をも許し、受け入れることのできる人たちだったからです。

さて紀元30年、「神の愛」という新しい福音を説いたイエス･キリストが、エルサレムのゴルゴダの丘で十字架刑に処され死にました。しかし、その3日後にキリストは復活し、すべての旧約の預言は実現されることとなりました。ところが、ユダヤ社会をはじめ多くの人たちは救世主キリストを信じず、むしろキリスト教信者を迫害したのでした。イエスが死んで復活したとき、サウロは20代の血気盛んな年頃でした。彼は現在のトルコ内にあるタルソスで、豊かなユダヤ人の家に生まれ、15歳のころユダヤ教勉強のためエルサレムにのぼり、著名な律法学者であったガマリエルのもとに学んでいます。そのサウロが、当時の伝統的なユダヤ社会から見て異端と考えられたキリスト教に、強い敵意を持ったことは十分考えられることです。

ところで、エルサレムにキリストの教えを熱心に説く男がいました。最初の殉教者となるステファノです。聖書のなかでのサウロの最初の登場は、このステファノの殉教の場面です。上着を預かる係りで登場しているのですから、まだ社会的な地位も高くなかったのだと思いますが、そこに立ち会ったサウロは、ステファノの最後を見て何を思ったのでしょうか。少なくとも、サウロがステファノの殉教に立ち会ったときには、伝統的な神さまの教えを乱すようなものは石打ちで殺されてしまえばよい、と思っていたはずです。しかし、その一方でサウロは、ステファノの最後に衝撃を受けたのではないかと思うのです。あのような最期を遂げるものがほんとうに神さまに逆らうもの、邪悪なものなのだろうか、従来のユダヤ教を超越したイエスの教えが正しいのかもしれない、と。それでも伝統的なユダヤ教に立つサウロは、いや決してそんなことはない、

私が子供のころから教わってきた神さまの教えに間違いがあるはずはない、とその考えを振り切ろうとしたと思います。この選択は、間違えば神さまに背く大きな罪となるわけですから、命を懸けた大きな決断であったでしょう。そして、ついに彼のなかでは、伝統的なユダヤ教の考えのほうが勝つことになりました。ユダヤの長老たちが「ステファノは神を冒涜した。石打ち刑に値する」と決めつけたので、群衆はステファノに石を投げつけて殺してしまいますが、結局、これに加担したサウロだったのです。

このステファノは、最初の殉教者であるだけでなく、イエス・キリストの真の意義を理解してユダヤ教からキリスト教を独立させた最初の人でしたが、彼の殉教の要因は、使徒たちがまだ克服できないでいたユダヤ教の中心部分である神殿礼拝と律法主義を批判し、イエスが神さまの権能を司っている、すなわちイエスは神さまであると端的に言ってしまったことにあります。これは、後にパウロが宣べ伝えた教えの先駆けとなったものでした。こうして議会に護送されてこられたステファノでしたが、その顔は救われた確信に満ちあふれていたのでしょう、天使のように輝いていたと言われています。

ところで、ステファノまでの使徒たちの教会は、復活の主を証ししてはいたのですが、神殿礼拝から抜け出すことができないでいました。実は、エルサレムの人々の多くが神殿礼拝に固執する陰には、使徒たちは別として、宗教上の信念とはまた違った理由があったらしいのです。それは、神殿でのさまざまな儀式のために、ユダヤやそれ以外の各地からのぼってくる多くの人々が落とすお金、それがエルサレムの人々のふところを潤していたというのです。神殿礼拝を批判するステファノは、ちょうど、神殿から商人たちを追い出したイエスと同じ反感を買ったのでした。そういえば、人々がステファノ目がけて一斉に襲いかかり、都の外に引きずり出して石を投げ始めたとき、彼は毅然とした態度で、人々のためにとりなしの祈りまで捧げて死についていますね。人々が石を投げつけている間、ステファノは主に呼びかけて、「主イエスよ、わたしの霊をお受けください」と言った。それからひざまずいて「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」と大声で叫んだ。ステファノはこう言って、眠りについた、と記されています。これも十字架上で息を引き取る前のイエスのことばと同じですね。このように今、キリスト者がキリストの恵みに与ることのできるのはステファノの殉教があったからなのです。

さて、サウロは大祭司にダマスコ（今のシリアのダマスカス）にある諸会堂宛の手紙を書いてもらいます。それは、イエスの弟子たちを捕まえて牢に入れてもよいという認可証のようなものでした。その手紙を携えて、サウロは同行のものを連れてダマスコに向かいました。そして、ダマスコの郊外まで来たときに事件は起こりました。突然サウロは光に打たれ、地に打ち倒され、主の声を聞くのです。

「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」

「主よ、あなたはどなたですか」

「わたしはあなたが迫害しているナザレのイエスである」

「主よ、どうしたらよいのでしょうか」

「立ち上がってダマスコへ行け。しなければならないことはそこで知らされる」

このことに関してはさまざまな言い分が聞こえてきます。サウロは砂漠の太陽で日射病になったのだという人や、いや違う、この地域は突然雷が発生する地域なので雷に打たれたのだという人もいるのです。その真偽のほどはわかりませんが、サウロにとって一番大事なこと、それはそこでイエスの声が聞こえたという

ことになります。サウロは、なぜ迫害するのかという言葉で、もしかするとこれはイエスか、と思ったかもしれませんが、同時に、そうでないようにあってほしいという思いもあったのではないでしょうか。それゆえその声に対して、主よ、あなたはどなたですか、と尋ねたのだと思います。その答えが、私はあなたが迫害しているイエスである、でしたから、自分が迫害している相手が主とわかり、サウロはそれこそ愕然としたことでしょう。まさに恐れていたことが起こってしまった、命をかけて決断したことが間違っていたのですから、もうサウロは何もいえなくなったのだと思います。さらにその声は、立ち上がってダマスコへ行け。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる、と告げるのです。サウロは、今までは信念に従い生き、こうするのが正しいはずだと思い込んでクリスチャンを迫害するなど、自分の信念の道をひたすら進んできたのでしたが、今ここでそれが大きく変化することとなりました。すなわち、サウロは自分の信念でなすべきことをするのではなく、何をなすべきかを告げられるものとなったのでした。しかも、イエスが直接語りかけてくださったのですから、彼はその声に聞き従わざるを得ませんでした。同行していた人たちには、声は聞こえましたが姿が見えなかったので、ものも言えず立っていたと記されています。もう誰も、口が聞ける状態ではなかったのですね。サウロが起き上がったときには、目が見えなくなっていましたので、人々はサウロの手を引いてダマスコまで連れて行きました。サウロはそこで、３日間、目が見えず、食べも飲みもしなかったと書かれています。

ところで、イエスはなぜ迫害者のサウロに現れたのでしょうか。なぜ他の迫害者ではなくサウロだったのでしょうか。それを説明するには、やはりステファノの殉教の衝撃が必要になります。サウロは、ただ迫害者であったのではなく、こころの底では同じくらい強い気持ちで、イエスは救い主かもしれないという思いをもっていたからこそ、イエスはこのサウロに現れ、そのこころを開放してくれたのではないでしょうか。

このようにサウロにイエスが現れ、サウロの心に回心の思いが表れましたが、それだけではキリスト者の仲間には入れません。何しろクリスチャン迫害の先陣を切っていた男です。ユダヤ教信者はもとより、キリストの使徒たちだってにわかには信ずることはできなかったでしょう。ですから、サウロがキリスト者になるには二人の協力者が必要でした。それは、一人はアナニア、もう一人はバルナバのことです。つまり、サウロのような偉大な人でも、協力者、理解者がいなければ、何もできなかったということ。神さまの御こころは遠大です。

それでは、まずアナニアとは何ものなのか、というところからみていきましょう。この名の意味するところは「神は現れた」とか、「神は答えられた」ということだそうですが、ダマスコにいたキリストの使徒のアナニアに、幻の中で主は、ユダの家にいるサウロという名のものを尋ねなさいと命じます。しかしアナニアは、サウロがどんなに恐ろしい男なのかを知っているがゆえに、とても受け入れられない、と主に訴えるのです。しかし主は言います。あのものは私が選んだ器である。私の名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを私は彼に示すのだ、と。サウロは主に選ばれた人であり、主のために苦しむようにと招かれた人なのは既述のとおりです。一方、サウロはそのとき祈っていました。それは、主がこころのなかで、アナニアという人があなたのところに来て、自分の上に手を置き元どおり目が見えるようにしてくれると言われたからでした。アナニアは主が命じられたように出かけて行き、サウルに会いました。アナニアからみれば、自分を捕らえて牢屋に入れるかもしれない迫害者サウルに会いに行ったのですから、何と勇気のいったこと

でしょう。そこで主の御告げのとおり、目の見えなくなっているサウルの上に手を置いて癒したのです。サウルは「目から鱗が落ちた」ようにふたたび目が見えるようになりました。現在でもよく用いられるこの表現は、サウロの回心の出来事から来ています。そして、サウルは身を起こしてアナニアから洗礼を受けたのでした。アナニアは、イエスの弟子の中で初めてサウロにこころを許し、信頼した人物となりました。このように、神に用いられた共同者、理解者がいなければ、伝道者サウロは生まれなかったのです。

さて、もう一人の共同者、理解者はバルナバです。このバルナバは「慰めの子」という意味で、それは愛称であり、本当の名前はヨセフといいました。キプロス島生まれのヨセフは、持っていた畑を売り、その代金を持ってきて使徒たちに差し出すほどやさしく同情心の深い人でした。この同情心がゆえに、のちにパウロと宣教旅行するときマルコを連れて行くかどうか意見が分かれたことがありました。パウロは厳しい人だったので、途中で帰ってしまうような意気地のないものは連れて行かないといい、同情深いバルナバはマルコを連れて行くといって争ったことがあったのです。このようにバルナバは、効率とか成果とかいうものよりも、人間そのものを大切にする、度量の深い人間性を持っていたといいます。このバルナバとパウロの出会いは、エルサレムで、でした。パウロはダマスコで、もち前の気性で激しくイエスが救い主であることを宣べ伝えましたが、それはユダヤ人たちをうろたえさせ、そして、ついには命まで付けねらわれるものとなってしまいました。そんなパウロは、城壁をかごでつり下ろされて逃げるという、とてもきわどいことをやって、やっと命を狙うものの手から逃れられエルサレムに行くことができました。その地でパウロは使徒たちの仲間に加わろうとしたのですが、かつては自分たちを迫害していた男です。誰も彼を信じないどころかむしろ恐れられました。パウロは容赦しない死刑執行人だといわれていましたし、スパイとして潜り込もうとしているのではないかとも思われたのです。そんななか、やさしく同情心の深いバルナバだけは彼を信頼し受け入れたのです。バルナバはパウロを本物だと信じたのです。それがゆえに、パウロはエルサレムで使徒たちと自由に行き来し、主の御名によって恐れずに教えることができるようになりました。このように、バルナバが受け入れてくれなければ、宣教者パウロは生まれなかったのでした。バルナバは、この後ずっとパウロの良き友、共同者として働くことになります。

パウロは回心してからはどんな迫害を受けても、どんな困難に会っても二度と信念を変えることがありませんでした。彼が選んだ道は非常に困難な伝道の道であったのに、です。彼は、まずバルナバと第１回の旅に出ますが、彼らが説いたのは、イエス・キリストの「愛の福音」です。当然といえば当然ですが、ユダヤ社会の受けは良くはなく、むしろ敵意を持たれた結果、パウロとバルナバは次第に異邦人の改宗のほうに力を注ぐようになります。パウロはリストラという町で、生まれつき足萎えの異邦人を「立て、歩け」と命じて、歩けるようにしましたが、異邦人たちはこの奇跡を見て、パウロたちを神（彼らの多神教の神）と崇めようとしました。しかしパウロは、彼らの信仰は誤っていると厳しく諭しました。それに反感を持ったユダヤ人たちは群集をそそのかし、ステファノと同じく彼を石打ちの刑にしてしまい、パウロは死にかけます。しかし、石打ち刑で死んだと思われ町の外に捨てられたパウロは、奇跡的に生き延びたのです。そして「キリストはわたしを選んだ、その教えを異邦人含め広く伝えるために」と確信したのでありました。

こうして、主によって生かされたパウロの使命感は、第２回と第３回の小アジアからギリシャへの大伝道旅行につながっていきます。第２回の旅は３年、第３回は５年にも亘りましたが、最後に立ち寄ったのがミ

レトスという港町でありました。パウロはそこでエフェソから教会の長老たちを呼んで、最後の説教を行います。その時の彼は、エルサレムにふたたびのぼれば、二度とみんなには会えないことを知っていました。ですから人々は、パウロにエルサレム行きを中止するよう懇願します。しかしパウロは、今や「死を覚悟して」最後の仕事に取り組み、エルサレムにのぼるため船出します（わたしたちのオラトリオ『パウロ』は、合唱がパウロの勇気と信仰の深さを賛美し、主の偉大さを讃えて幕となります）。エルサレムにのぼったパウロは、ユダヤ人の訴えによりローマ兵に捕らえられ、最期にはローマで十二使徒の一人のペテロと共に殉教します（このときの皇帝がネロでした）。ユダヤ律法の徒サウロが使命を全うして殉教し、キリストの大使徒・大伝道師「聖パウロ」になったのです。現在、ペテロの殉教の地バチカンの丘には聖ペテロ大聖堂が、そしてパウロ殉教の地にはトレ・フォンターネ（三つの泉）の教会が建てられています。

クリスチャンのわたしとしては、パウロの功績なくして今のわたしはないわけですから、こころより感謝しています。また、わたしたちにとってのステファノ、アナニアとバルナバは誰なのかを思い返すことも大切かもしれません。そして、願わくはわたしたち自身が、神さまに用いられてステファノ、アナニアとなり、バルナバとなっていくことが神さまの御心なのかもしれません。とてもできそうにはありませんが。

メンデルスゾーンのオラトリオ『パウロ』を、わたしは過去一回しか歌ったことがありません。その最初で最後の演奏が市販化され購入することができますが、自分の演奏はあまりパッとしません。しかし、これまで縷々述べてきましたように、『パウロ』に対するわたしの思い入れは相当なものがあると自覚しています。いろいろな条件が整わないと絶対に演奏できない楽曲ですが、わがフェラインがわたしの我が儘を聞き入れてくださり、こうして演奏会ができることにこころより感謝しております。

パウロ役の多田羅迪夫先生は、わたしが芸大の学部生だった頃、院生だった大先輩です。その頃の多田羅先生の歌を聴く機会はほとんどなく、ほどなく先生はドイツに渡られましたから、遅れてわたしが楽壇デビューし、何年かキャリアを積んだ頃、先生が帰国なされて初共演したときのこと。すごく鳴り響く声で、日本人にもこんな外人みたいなガンガン鳴る人がいるんだと心底たまげました。その多田羅先生とは、その後、N響定期や何やらでたびたび共演させて頂き、おこがましいですが、おたがいに音楽を認め合うすばらしい声楽家同士のお付き合いをさせて頂いております。また現在は、二期会バッハ・バロック研究会の講師を二人で務めてもいます。その研究会のハイレベルな会員がアルトの三谷亜矢さん。今回は出番が少ないですが、彼女の音楽的で安定した歌唱をぜひふるさとのみなさんに聴いて頂きたくてお願いしました。またテノールの鈴木准さんは、今わたしが最も信頼しているテノール歌手の一人で、北海道札幌市のご出身。わたしと同じ北国歌手に特別のエールを送りたいと、パウロは歌ったことがない、と仰る彼を、パウロのテノールはすばらしいレパートリーになるよ、と口説いて登場願った次第です。そして、ソプラノの村元彩夏さんは、ご存知岩手大学のわたしの弟子。友愛歌曲コンクールに優勝しウィーンでリサイタルを持つなど、今は超売れっ子の歌手として全国を飛び廻っています。今年芸大院の博士課程を修了予定なので、彼女の歌はますます磨きがかかっていくでしょう。団内から出す小原一穂君、千田敬之君のバスのソリストとともに、村元さんもフェラインの会員としてわたしとしては頼もしいかぎりの矜持と自慢の存在です。

最後になってしまって大変恐縮ですが、本日のオケメンバーは気が置けない旧友ばかり。彼らとはカンタータ・クラブの先輩・後輩としておおいに語り合い、飲み合った仲。おたがいが酸いも甘いも噛み分ける大

切な存在として尊敬しあっています。とくに、わたしの弱点を知り抜いているトップメンバーは、ほんとうに頼りがいのあるナイスガイ。彼らなくして今日の演奏は絶対に成立しないと断言できるほど、全幅の信頼をおいています。

本日の『パウロ』はもう二度と振れないだろうと思っています。63歳の今、あと何年音楽活動ができるか、甚だあやしいからです。でも神さまはこうして『パウロ』を振る機会を与えてくださいました。されば、あと振りたいのは出エジプト記を題材としたヘンデルのオラトリオ『エジプトのイスラエル人』と、わたしの大好きなドヴォルザークの『レクイエム』。できるわけがないと思っていた『パウロ』が実現した今、希望を持ってもいいのかなとひそかに想いを秘めています。

残りの人生、ステファノやアナニア、バルナバのような信念と思いやりのある誠実な人生を全うできれば、神さまはまだまだすてきなプレゼントを用意していてくださるような気がしているのは、甘いですかね、みなさん。

2014.11.24.

（盛岡バッハ・カンタータ・フェライン指揮者：佐々木正利）

盛岡バッハ・カンタータ・フェラインの歴史

1977年に結成以来「J.S.バッハの教会カンタータの研究と演奏を通して音楽芸術を追求する」ことを目的として、これまで、37年間活動を続けてきました。主な演奏会と演奏旅行の経過は以下のとおりです。

1977/02	「カンタータを歌う会」として発足	
1977/06	「盛岡バッハ・カンタータ・フェライン」に改称	
1978/02	「バッハコンツェルト」 カンタータ45番、147番	指揮：小林道夫（芸大と共演）
1979/10	「BACH ABEND」 カンタータ 158番、131番	指揮：小林道夫
1980/02	「バッハの夕べ」 カンタータ80番	指揮：小林道夫（芸大と共演）
1980/12	この年より「チャリティー・コンサート」を盛岡市内のバロック音楽愛好家グループと共催（～1997）	
1981/07	「BACH ABEND」 カンタータ 195番、182番	指揮：小林道夫
1982/11	「バッハの夕べ」 カンタータ 158番、4番	指揮：佐々木正利
1985/03	J.S.バッハ生誕 300年記念演奏会「ヨハネ受難曲」	指揮：佐々木正利
1985/11	仙台北教会宗教音楽の夕べ「メサイア」 メサイア(G.F.ヘンデル)	指揮：佐々木正利
1985/11	G.F.ヘンデル生誕 300年記念演奏会「メサイア」(G.F.ヘンデル)	指揮：佐々木正利
1986/04	「宗教音楽の夕べ」 ドイツ・レクイエム(H.シュッツ)ほか	指揮：佐々木正利
1986/04	第1回ドイツ演奏旅行 ドイツ・レクイエム(H.シュッツ)ほか	指揮：佐々木正利
1986/07	「東京ゾリステン演奏会」共演 スターバト・マーテル(ペルゴレージ)	指揮：赤松 安
1987/03	創立10周年記念演奏会「カンタータの夕べ」カンタータ34番、70番、102番ほか	指揮：佐々木正利
1987/11	ムシカ・デラルテ・トウキョウ演奏会「バロック音楽の夕べ」（主催）	
1988/03	仙台宗教音楽合唱団との合同演奏会「ミサ曲ロ短調」	指揮：佐々木正利
1988/09	「今仲幸雄バリトンリサイタル」（主催）	
1988/11	「ミヒャエル・ショッパーバリトンリサイタル」（主催）	
1989/04	「二重合唱の夕べ」 モテット2番、5番(J.S.バッハ)ほか	指揮：佐々木正利
1990/03	仙台宗教音楽合唱団との合同演奏会 クリスマス・オラトリオ4～6部ほか	指揮：佐々木正利
1990/10	「アグネス・ギーベル 佐々木正利 ジョイントリサイタル」（主催）	
1990/12	第2回ドイツ演奏旅行 クリスマス・オラトリオほか	指揮：C.ポッペン、佐々木正利
1991/03	ドイツ演奏旅行帰国演奏会 モテット1, 2番(J.S.バッハ)ほか	指揮：佐々木正利
1991/10	「カンタータ第140番、コーヒーカンタータ」	指揮：H.ヴィンシャーマン
1992/03	「バッハとメンデルスゾーンのカンタータの夕べ」カンタータ93番ほか	指揮：佐々木正利
1993/10	「マタイ受難曲」（盛岡、仙台、岡山、東京） マタイ受難曲(J.S.バッハ)	指揮：H.ヴィンシャーマン
1994/07	「カンタータ147番」仙台バッハアカデミーにおいて カンタータ147番	指揮：佐々木正利
1994/12	弘前市民クリスマス：G.F.ヘンデル「メサイア」演奏会に出演	指揮：佐々木正利
1995/04	第3回ドイツ演奏旅行 天地創造(J.ハイドン)ほか	指揮：ヨセフ・ツィルヒ、佐々木正利
1995/08	一関・東日本合唱祭参加 モテット6番ほか	指揮：佐々木正利
1995/09	剱持清之・トリオフィオリーレ「モーツァルト室内楽の夕べ」（主催）	
1995/10	青山町教会チャペルコンサート 天地創造抜粋(J.ハイドン)ほか	指揮：小原一穂
1995/11	「天地創造」（盛岡、仙台）	指揮：岩城宏之

1996/03	「バッハの夕べ」演奏会 カンタータ 21,131 番、モテット 4 番	指揮:佐々木正利
1997/04	20周年記念演奏会「昇天祭オラトリオ」「マニフィカト」ほか(J.S.バッハ)	指揮:H.J.ロッチュ、佐々木正利
1998/11	「ヴィンシャーマンのロ短調ミサ」演奏会 ミサ曲ロ短調(J.S.バッハ)	指揮:H.ヴィンシャーマン
1998/12	「盛岡いのちの電話」チャリティーコンサート カンタータ 151 番,191 番、讃美歌数曲	指揮:佐々木幹雄
1999/04	シュッツのダビデ詩篇とバッハ、メンデルスゾーンのモテットの夕べ	指揮:佐々木正利
1999/11	第4回ドイツ演奏旅行 ミサ曲ロ短調(J.S.バッハ)	指揮:H.ヴィンシャーマン
1999/11	ドイツ演奏旅行 ダビデ詩篇曲3曲(シュッツ)ほか	指揮:佐々木正利
1999/12	「盛岡いのちの電話」 チャリティー・コンサート	指揮:佐々木正利
2000/11	クリスマス・オラトリオ全曲演奏会	指揮:H.ヴィンシャーマン
2001/03	「盛岡いのちの電話」開局 10 周年記念 チャリティー・コンサート	指揮:佐々木正利
2001/08	関連団体ドイツ演奏旅行に有志参加 カンタータ 39 番, 102 番, 158 番 ほか	指揮:D.ティム
2001/10	クルト・マズア指揮ロンドンフィル ベートーヴェン「第九交響曲」演奏会	
2002/01	25 周年記念演奏会 モテット Op.29,74(ブラームス)ほか	指揮:佐々木正利
2002/10	ライプツィヒ・バロックオーケストラ演奏会 カンタータ 45 番 ほか	指揮:D.ティム
2002/12	鳴海真希子さん追悼演奏会 ヨハネ受難曲から第 39,40 曲(J.S.バッハ)	指揮:佐々木正利
2002/12	久慈・こはくのまち第九演奏会 交響曲第9番「合唱」(ベートーヴェン)	指揮:石川善美
2003/11	マタイ受難曲演奏会盛岡公演 マタイ受難曲(J.S.バッハ)	指揮:H.ヴィンシャーマン
2003/12	マタイ受難曲演奏会東京公演	指揮:H.ヴィンシャーマン
2004/07	関連団体ドイツ演奏旅行に有志参加 カンタータ 131 番, 21 番	指揮:D.ティム
2005/01	マルコ受難曲演奏会 カンタータ 106 番、79 番、105 番	指揮:佐々木正利
2005/04	シュレスヴィッヒ・ホルシュタイン・アカデミー合唱団盛岡公演	指揮:佐々木正利、ロルフ・ベック
2005/12	第5回ドイツ演奏旅行 メサイア/ドイツ語版(ヘンデル)ほか	指揮:G.シュマールフス、
2007/01	ヨハネ受難曲演奏会 ヨハネ受難曲(J.S.バッハ)	指揮:H.ヴィンシャーマン
2007/06	飯靖子・佐々木正利ジョイントリサイタル(主催)	
2007/12	盛岡市民文化ホール開館10周年記念 マーラー「復活」演奏会	指揮:飯森範親
2007/12	台湾「クリスマス・オラトリオ」演奏会 長榮交響楽団:主催	指揮:G.シュマールフス
2008/06	珠玉のカンタータ ～バッハからの贈り物～ カンタータ 18 番、187 番、78 番、182 番	指揮:佐々木正利
2008/12	スイス演奏旅行 マニフィカト(ブクステフーデ)ほか	指揮:佐々木正利
2010/01	リリング・ロ短調ミサ盛岡公演 ミサ曲ロ短調 BWV232 (J.S.バッハ)	指揮:H.リリング
2010/10	花巻温泉チャペルコンサート	指揮:佐々木正利
2010/12	東フィル・第九演奏会 交響曲第9番「合唱」(ベートーヴェン)	指揮:D.エッティンガー
2011/06	東日本大震災の犠牲者に捧ぐモーツァルト・レクイエム演奏会	指揮:佐々木正利
2012/02	イタリア・バロックの煌めき キリエ、クレド、マニフィカト(ヴィヴァルディ)ほか	指揮:佐々木正利
2013/01	バッハからの贈り物 珠玉のカンタータ Vol.2 カンタータ 4 番、93 番、161 番、102 番	指揮:佐々木正利
2013/11	ピアノ 2 台の伴奏によるドイツ・レクイエム演奏会 ドイツ・レクイエム(J.ブラームス)	指揮:佐々木正利

なおこのほかにも、クリスマス・チャリティーコンサート、チャペルコンサート、合唱祭、新春コーラスコンサートなどに参加、出演しています。

十年がかりの「パウルス」演奏会企画

本日上演する「聖パウロ」演奏会、昨年１１月の「ドイツ・レクイエム盛岡公演」が終わってすぐに、準備に取り組み始めました。ちょうど１年前のことです。

メンデルスゾーンの「聖パウロ」、実は１０年前に一度チャレンジした時期がありました。その直前に、やはり一年以上の準備期間をかけた盛岡と東京での公演があって、それはＪ．Ｓ．バッハの「マタイ受難曲」。ヘルムート・ヴィンシャーマン指揮ドイツ・バッハゾリステンとの共演でした。運営的にもかなりタフな企画だったので、演奏会が終ってから、この後はしばらく休みがてらやりたいなあ、と考えたものです。その矢先、指揮者の佐々木先生から提案されたのが、件の「聖パウロ」。紫色の Carus 版の楽譜は、厚くて重くて、合唱の曲数もたっぷり。作品の構成も、背景も、右も左もわからないまま、まずは歌ってみることになり、「全曲ひとまわり」するのに、かれこれ４ヶ月位かかりました。

２周目に入ってからは追々、内容を噛みしめながら、曲に対する理解も歌うこと自体も、掘り下げが必要になると考えているさなか、次の演奏会の企画内容を検討する過程で、このパウルス（「聖パウロ」のことを、合唱団の中では「パウルス」と言っている人も多いのです、Paulus と書きますし）、あっけなく立ち消えになってしまったのです。

どうしてそうなってしまったか、あまり定かではないのですが、そもそもパウルスの練習スタート時に、次の演奏会がパウルスになるか、を具体的にイメージしていなかったことは事実です。結局、「次」はバッハのカンタータづくしの企画になりましたが、いま思い返せば、ここはやはりパウルスを取り上げるに機が熟していなかったのだと言わざるを得ません。しかし、「あの時、結局パウルスを途中で放り出してしまったよね」という思いは、一度しか声を出さなかった楽譜を見かけるたびに蘇り、その後も一年に一回かそこらは、どこからともなくその話が出ていました。

そんな中での、去年１１月からのパウルス練習「再開」でした。十年かかって機が熟したのです。「パウルス、やらないでしまったよね」のみではなく、あれ以来バッハだけに限らず、昔に比べると取り上げる作品の幅が広くなりました。モーツァルトやブラームスにも、がっぷり四つで取り組みました。そんな経過があって、一つの到達点としての「パウルス」演奏会です。曲の数が多く、長いし、相変わらず楽譜も重いし、いろいろ準備が大変で、すべからく胸突き八丁なのですが、フェラインにとって空前の演奏会が、ついにこのあと始まります。濃厚なプログラムを、じっくりご堪能ください。

渡　辺　信　之

パウルス演奏会企画実行委員会・チーフマネージャー
盛岡バッハ・カンタータ・フェライン事務局長

合唱出演者

《 盛岡バッハ・カンタータ・フェライン 》

【ソプラノ】

●赤塚　温子　朝倉　美優　○板宮　　渚　太田　彩里　大矢　克子　岡野美映子　岡山ひかり
小川　牧子　加藤　真香　熊谷　充代　小坂　文代　昆　　千晶　昆野　志穂　佐藤　聡子
佐藤　澄江　佐藤　千明　柴　絵梨奈　鈴木みずき　対中　牧子　高橋　貴絵　高橋　幸枝
高橋　悠奈　田口　真澄　田村　広子　千葉愛利紗　外崎　麻子　○中村　美咲　奈良めぐみ
芳賀　志歩　三原　佳織　本良いよ子　八木　絵未

【アルト】

●在原　　泉　猪狩　裕海　一井　彩来　★小川　暁美　小川　睦子　小野寺洋子　金子　千鶴
桐原　絹子　佐藤　　公　新宮　央子　鈴木　英美　李沢　有希　高橋　富子　○田口千紗都
○多田　繭子　千葉　春奈　続石真奈美　野澤安里彩　原　　穂波　平井　良子　藤澤　久子
藤代　伸子　本田　奏子　三宅真佐子　茂木　容子　吉岡　英子G　渡辺しをり

【テノール】

○伊藤　陽平　小川　隆弘　加藤　進也　佐々木　駿　★佐々木幹雄　田中　雅史　中野　奏保
中野　寛司　新山　隆健　○西野　真史　細沼　佑貴　◇堀川　佑也　三原　正敏　●吉村　　哲

【バス】

赤塚　貴史　阿部　　薫　荒井　渉吾　○宇津野智成　大室　桂太　★小原　一穂　○小菅　悠樹
佐藤　玲央　高橋　　聡　玉山　彰彦　千田　敬之　角掛　裕喜　遠山　　徹　芳賀　郁夫
松橋　　清　若林　敦盛G　渡辺　信之

指揮者：佐々木正利
★　コンサートマスター / ミストレス
◇　アシスタント・コンダクター

伴奏者：平井　良子
●　パートリーダー
○　サブパートリーダー
G　仙台宗教音楽合唱団

《 岩手大学教育学部附属小学校音楽部 》

新屋　　歩　太田　栞里　岡本　真結　小原　永莉　山﨑　悠輝　盛田めぐみ　中村　　冴
本庄ななか　北田李乃花　原科　芽衣　髙畑　光汰　小田　新菜　小暮　香乃　加藤　史也
内藤　美空　藤澤　依芙　諸冨なごみ　小林　真生　細田　　真　大森史旺菜　宮本　悠加
及川このみ　佐々木青空　松尾　桃芳　飯島　　百　菅原　幸奈　岡田　藍宇　亀田　朱莉
藤田　奈央　三浦　峻介　山﨑　彩音　石川　　奏　平野　有莉　小山　美羽　小野健太郎
髙橋　茉衣　浦田　侑奈　佐々木綾音　冨澤　蒼依　劉　　藍曦　佐々木春風　小原　万奈
千葉　京佳　金田　真凜　今井　　琳　山内　優奈　佐々木凛花

会　員　募　集

盛岡バッハ・カンタータ・フェラインでは、会員を募集しています。合唱が好きな方、年齢、経験問わず歓迎いたします。お気軽に見学にお出でください。

◆練習日時：毎週火曜日　　午後 6:30-9:00
　　毎月１回日曜日午後 1:30-5:00

◆練習場所：内丸教会（毎週火曜日、日曜はその都度）
　　（盛岡中央郵便局から与の字橋方向へ、一つ目の信号手前右側角）

◆お問合せ：ＴＥＬ　019-665-1614
　　ＦＡＸ　019-665-1613
　　E-mail　mail@mbkv.jp
　　Ｗｅｂ　http://www.mbkv.jp/

《実行委員会メンバー》

役　割	氏　名	役　割	氏　名
チーフマネージャー	渡辺　信之（印刷チーフ）	バックステージ統括	茂木　容子
サブマネージャー	堀川　佑也（共演・楽譜チーフ）	ＶＩＰアテンド	八木　絵未・田口千紗都・多田　繭子
ＰＲ担当	小菅　悠樹・玉山　彰彦・岡野美映子		田口　真澄・野澤安里彩・小菅　悠樹
企画会計担当	猪狩　裕海・本田　奏子・朝倉　美優	ケータリング	原　穂波・昆　千晶
共演・楽譜担当	野澤安里彩・朝倉　美優・玉山　彰彦	ステージマネージャー	新山　隆健・中野　奏保
チケット・プレイガイド担当	野澤安里彩・玉山　彰彦・渡辺しをり	フロント	赤塚　貴史
印刷担当	青瀧　憲子・堀川　佑也	歌詞対訳	若林　敦盛（仙台宗教音楽合唱団）
チラシデザイン担当	本郷由紀子・野澤安里彩	スチール写真	カメラのキクヤ
広告担当	猪狩　裕海・岡野美映子	録音・録画	ＩＢＣ開発センター・畠山写真館
アンケート担当	青瀧　憲子（共演者旅行手配兼務）	チラシ・プログラム印刷	三澤印刷

【訂正】オーケストラ　合唱　プロフィール

児童合唱のプロフィールを訂正、差し替えいたします。

岩手大学教育学部附属小学校合唱部

（児童合唱）

岩手大学教育学部附属小学校合唱部は、歌が好きな４、５、６年生が集まり、朝や放課後に活動している。校内では、全校の音楽的なリーダーとして、朝会や集会の中で活躍。岩手教育芸術祭、ニューヨークヤングピープルズコーラスとの共演、訪問演奏など、校外での演奏の機会にも恵まれ、歌声を披露している。ＩＢＣ子ども音楽コンクール、合唱小アンサンブルコンテスト、ＮＨＫ全国学校音楽コンクール（Ｎコン）等に出場し、Ｎコンに於いては、東北代表として全国ブロックコンクールに平成８年に初出場、２３年・２４年・２５年・２６年と４年連続出場、平成２５年度は銀賞の栄誉に輝いている。